
ムー大陸にようこそ

瓦vもすけ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ムー大陸にようこそ

【Nコード】

N8402H

【作者名】

瓦Vもすけ

【あらすじ】

2003年の夏に、地球に宇宙人がやってきた。宇宙人は、太平洋上にムー大陸を作って、住み始めた。僕らと仲良くなりたい人、みんなおいで。宇宙人の呼びかけで、多くの地球人がムー大陸に移り住んで、共同生活を開始する。お下品なギャグ物語。

01 相談所の奈々太ちゃん

珍味くんは、見た目もサイズも猫そのものだけど、宇宙からの黒船に乗って来着した宇宙人の一人である。今は亀山相談所で相談員をやっている。

宇宙から黒船がやって来たのは、2003年の暑い夏であった。

いきなり銀河の向こうから宇宙船がやってきたのだ。テクノロジーの差はかつて日本人が経験した黒船や、ジオンと連邦の差どころではなかった。

試してみるまでもないけど、試してみた国があつて歴然となった。各国首脳は冷や汗を流しながら宇宙人に「話し合おう」とにじり寄った。

交渉の内容や過程は、色々公表されたけれど。

国家、民族、宗教、その他。

それぞれ言うことが、てんでバラバラ。

結局、何を目的とした来訪なのか、地球の代表者たちと宇宙人の間で、どんな約束が定められたのか、一般の人には判然としなかった。

だけど、誰の目にも明らかな結果が、一つだけ現れた。

それが日本の隣、太平洋上にひょっこり現れた、ムー大陸である。

大きさは、伝承よりは小さくオーストラリア大陸くらい……それでも大きいけど。これを一年くらいで宇宙人は造っちゃった。

僕らと仲良くなりたい人、みんなおいで

——ムー大陸の管理人

そんな広告が2004年の夏、世界中のマスメディアを席巻して。それから、何だかんだがあつて。

2010年の今。

ムー大陸には、沢山の町が出来て、人が移り住んで、宇宙人と仲良く暮らしている。

亀山町も、そんなムー大陸にある町の一つである。

『そんなに新しいお母さんのことが、嫌いなんか？』

珍味くんが訊ねると、奈々太ちゃんはちよつと拗ねたように唇を突き出し、斜め上を見て考え、こつくりと頷いた。

「目からすぐビームを出すから嫌い」

『まあ、マズルドーマ星人やからなあ』

困ったように言つて、珍味くんは猫的に後ろ足で耳の根元を掻いた。

地球で言うところの蠍座にあるマズルドーマ星のマズルドーマ星人は、眼力が半端でないことで、有名だった。

「怒るとね、赤いビームを出すの」

『まあ、出すけどな。でも、相当怒らさん限り、人体に害はないレベルなんやし。意外と暖かいから、新手のコタツやと思えばええねんで?』

今は夏だし、そうとう怒らすと害があるけど。

「でね、喜ぶと青いビームを出すの」

『青いビームはあれやで。美肌効果が抜群なんやで。どんどん喜ばしてどんどん浴びてたらええんちゃうか? ぴちぴちになれるで水滴も弾くで』

浴びすぎると、毛が抜け落ちて青魚みたいになるけど。

「ぼけー」としてるとね、緑色のビームをひよろひよろ出してるの」
『緑色のビームは癒し効果が抜群や。Zカロチンが豊富やねん。適度に浴びてったら野菜嫌いのお子さんもすすくすすく育つねんで』

珍味君の星では、マズルドーマ光線ですくすく育ち、体長3メートルを超えた仲間の逸話が残っている。

「哀しい時は、茶色いビームを出すの」

『あれはあかん! あれだけは浴びたらあかんで! マズルドーマ星人を宇宙の驚異にしている最悪のビームやからな! 茶色は!』

極度の不安や恐怖、または憂鬱時に、マズルドーマ人は茶色の光線を発する。

一種の防衛反応、拒絶反応であり、殻に閉じこもる好意だ。
浴びた者は、即座にマズルドーマ星人の前から立ち去りたくなる。
具体的には、便意におそわれるのだ。

珍味くんも射抜かれて難渋したことがあった。

『……でも、便秘の時には良いかもしれへんで?』

珍味くんは、プラス思考でさりげないフォローをした。

「……最近、ずっと茶色いビームばかり出してる」

『それは、……困った話やなあ』

毎日浴びると、どんな強情な便秘だって下痢ぴーになってしまうだろう。

「あんなやつ、絶対お母さんって認めないから」

奈々太ちゃんは俯き、ぼそりと呟いた。

奈々太ちゃんは、小学3年生の女の子である。

目下、家出中だった。

発端は、奈々太ちゃんのお父さんが、再婚したことだ。

相手は、ないすばでいーな宇宙人だった。

名を、花子という。

身長は169cmで、体重は極秘事項。

スリーサイズは上から100・55・89。

それでお顔がモーニング娘。を全部足して人数で割ったみたいに可愛らしい。

マズルドーマ星人は、姿形も考え方も地球人とよく似ている。

地球人より頑強で、多少、目からビームを出すけれど。

そんな花子さんを、奈々太の父・山岸道夫が家に連れてきて、

「奈々太、新しいお母さんだよ」

と鼻の下を伸ばしながら紹介したとき、奈々太ちゃんは即座に反対した。

「やだっ」

でれりとした父の顔を見た瞬間、なぜだか奈々太は反射的に言っ

てしまったのだ。

そしたら、花子さんは哀しそうに目を伏せた。

あっ、言っちゃった。

と、奈々太が思ったときには伏せつた花子さんのアイズ両目からは、涙ではなく茶色い光が迸っていた。

奈々太は生暖かい光に包まれて。

猛烈にうんこがしたくなって、トイレに駆け込んだ。

……。

……。

……。

「わたし、絶対に帰らないんだもん」

奈々太ちゃんは、頬をふくらまし、強く強く言い切った。

「絶対に帰ってなんかやらないんだもん」

奈々太ちゃんは、ちらちらと珍味くんを盗み見るように伺っていた。

奈々太ちゃんの隣の椅子の上と、その下の床には、家出と呼ぶには多すぎる荷物が鎮座していた。

はふぁ。

と珍味くんは、ため息か欠伸かわからない息を吐いた。
すくつと、後ろ足で立ち上がって。

猫なりに前足を組んで、目を瞑った。

『しゃあないなあ。所長には俺から言っておくから、今日のところは、相談所に泊まっていき』

「うん！」

奈々太ちゃんは、珍味くんを抱き上げて頼ずりした。

奈々太ちゃんが相談所の二階で寝入った後。

珍味くんはもう一度ため息を吐いた。

ばらばらっと「宇宙人・大百科事典　ネコール帝国出版」のマズルドーマ人の項目を見る。

目から出る怪光線の特徴と『わたし、こんな目に遭いました』というネコール人の経験談が列記され、マズルドーマ人は、危険、にカテゴライズされている。

「難儀してるようね」

珍味くんは声をかけたのは、亀山相談所の責任者、亀山相談所所長・坂本猫馬さかもとびょうまだった。

自称・20歳。

今日は真っ赤に染めた髪を、後ろで結わえてポニーテールにしている。

やせているくせに肌はつきたての餅のように白くてふっくら、きめが細かい。

珍味くんは何も答えず、猫的に情けない顔で、所長に愛想笑いをした。

珍味くんは、駆け出しの相談員である。

地球に来て、この仕事を始めてから、まだ半年も経ってはいない。もっとも所長だって、5年くらいのキャリアしかないだろうけど。

珍味くんが、初めて奈々太ちゃんから相談を受けたのは、2週間くらい前である。

公園のベンチで黄昏れている彼女を見つけて、珍味くんが声を掛けたのだ。

それから彼女は、毎日のように珍味くんのもとへ、相談に訪れている。

なのに珍味くんは、一向に解決してあげることが出来ずにいる。問題解決のためには、奈々太ちゃんとだけではなく、ご両親ともじっくり話し合わないといけない。

そう珍味くんは考えて、一度だけ奈々太ちゃんのお家、山岸家を訪れたことがあった。

珍味くんが、奈々太ちゃんの話の切り出すと。

花子さんは悲しそうに瞳を伏せ、涙を流した。

ああ、花子さんもやっぱり思い悩んでいたのだ。

そう珍味君は思って猫なりに優しく目を細めた。

しかし花子さんは、涙と一緒に茶色い光線も流していた。

ああ、うんこがしたい、珍味君はそうも思ってヒゲを震わせた。

そんなわけで珍味君は頷きながら気さくにうんこをした。

猫種と人間種との間にそびえ立つうんこに対する文化的、生物的な価値観の相違。

それが、悲劇とうんこを産んだ。

座布団の上のほやほやを目撃した花子さんは、瞬間的に赤い情熱

……というか怒りの光線を迸らせた。
マズルドーマ人の視線光は、意志ではなく感情に直結している。
本人にも制御できない。致し方なし。

「あの、ごめんね」

舌を出して謝る花子さんに見送られて。

珍味君は自らの毛が焦げる臭いに満たされた救急車の中で、奈々太ちゃんが帰りたくない気持ちを理解出来た気がした。

……。

「だいじょーぶよ」

心配そうな珍味くんの頭を、猫馬さんはわしゃわしゃと撫でた。

「奈々太ちゃんはまだ小学5年生だから。お父さんを取られるみたいで寂しいだけなのよ」

『そうなんかなあ』

「ええ、そうよ」

所長はふふふつと笑った。

「あとね、反抗したい年頃。珍味くんは宇宙人だし猫だからわからないと思うけど、地球人の子供はだいたいあれくらいの年頃によく家出するの。わたしも5年くらい家、帰らなかつたし」

それは大丈夫やないやろう。

珍味くんは思ったけど、黙っていた。

「奈々太ちゃんに必要なのは、時間と、友達よ。友達は、珍味くんが適任ね」

また猫馬さんは、珍味くんの頭をわしゃわしゃとかき混ぜた。

実はちょっと痛いから止めて欲しいと珍味くんは常日頃から思ってたけど、言えずじまいで居る。

「内緒にしてたけどね、実はわたし、彼女のお母さんに何度か会ってるの」

ふふふつと笑って猫馬さんは珍味くんに打ち明けた。

「良い人だよ。花子さん。美人だし。確かに目が青くきらきら輝いてるけど、他は地球人と変わらない感じ」

『茶色いビームは飛んでこんかったか？』

猫馬さんはふつくらした唇に人差し指を当てながら、視線は斜め上を向いて思案顔。

「茶色いビーム？ どうだったかなあ？」

猫馬さんは首を傾げた。

すつとぼけてるのか、本当に覚えがないのか。

「とにかく、時間に任せましょうね」

所長はそう言ってから、珍味くんをわしゃわしゃして、二階に上がっていった。

珍味くんは、はふあとため息を吐いたあと、ヒゲを振るわせ、届く範囲で毛繕いする。

所長の言うことも、わからないではなかった。

でも珍味くんは違うんじゃないかと思っていた。

奈々太ちゃんが持ってきた荷物の量から考えて、家出ではなく、彼女はお引越しの心構えで居るようだ。

奈々太ちゃんはお父さんを取られて悔しいのではなく、逃げてきたのだ。

原因は全て、あの茶色とか赤とかの光線だと、珍味くんは睨んでいた。

これは立派な星の葛藤（異星人の文化的、生物学的など多種多様な相違から来る衝突）ではないだろうか。

このまま時間に任せていたら大変なことが起こるのではないか。相談所の持てる権限の全てを、宇宙の叡智の全てを結集してでも、迅速克つ穩便に解決すべき事案なのではないだろうか。

珍味くんは心配だった。

奈々太ちゃんが心配だった。

花子さんも心配だった。

彼女もまた、星の葛藤のなかで苦しんでいるのだ。

02 奈々太ちゃん家の事情

地球に來れば、正義のヒーローになれると思っていたのに。

でも、なれなかった。

マズルドーマ宇宙観光局が造ったDVDでは、暗黒破壊結社の侵略によって、地球は祝マザーズ上場と言われるまでに、多数決で駄目っぱかった。

そんな駄目っぱな中。

彼らは敢然と立ち上がったのである。

増殖していく五人の戦士。

その名も増殖戦隊ゴキデンジャー。

挨拶はもちろん「ゴキげんよう」

ゴキデンジャーは茶羽市ちやばねを飛び立って黒光市くろひかり、貝柱市かいしらと勢力を拡大、どんどん仲間を増やして7話目くらいで何がなんだか25万人規模になり鳥取全域を覆い尽くし、友情の力、つまりは数の理念によって暗黒破壊結社を破壊していつて日本に対して独立を宣言した。

「今日から君もゴキデンジャーだ！ 今ならもれなくゴキ魂ベルトを買うだけで、誰でも、ほんとともうどうしようもないくらい誰でも、ゴキデンジャーになれるぜ！」

ああ、わたしもなれる。

なれるんだ。

正義のヒロインになれる。

わしゃわしゃ羽ばたくことが出来る。

けっこういい給料を貰うことが出来るんだ。

花子さんは思った。

思ったら居ても立ってもいられず、花子さんは移民船に乗り込んでいた。

止める両親を振り切り、全財産をはたいて。

待っていて、ゴキデンジャー。

私の新しい職場。

ちょっとしたミスで仕事を失って、再就職も決まらず失業保険も三ヶ月前に終了したし、親友も結婚したし、別の親友も結婚したし、さらに親友と親友が結婚したりで、花子さんは、何となく追いつめられていてメルヘン世界に逃げた。

2年かけてたどり着いた地球で。

るるるるー、がおー。

ゴキデンジャーは彼女を待っては居なかった。

チャバネブルーも、カブトムシレッドも、カナブンピンクも、クワガタゼリーも、バナナイエローの五人——というより五種類——の戦士×何匹＋色々たちは。

誰一人として彼女を待っては居なかったのだ。

…… 100万人もいるのに。

よくあることではあった。

他の星の情報が混じっていたり、うわさ話が一人歩きしたり。創作された物語が現実と混同されて、さも真実のように伝えられたりと。

他の星の話は星間距離に比例し信憑性が薄くなり、神秘性だけが高くなるのである。

マズルドーマ星の宇宙観光局は、文化的資料として入手した特撮DVDを、そのまま役所クオリティーで実話として公表してしまったのであった。

花子さんはそれを信じた。

他にも沢山のマズルドーマ人が信じた。

マズルドーマ星はかなり偏差値の低い星だと、ご近所星域では定評があった。

地球からかなり離れたマズルドーマ星から沢山の宇宙人がやってきたのは、そういうわけでもあった。

その殆どの人は現実に打ちのめされて、がっかりして帰途についた。

お土産はちゃんと買って帰った。

フィギアとか抱き枕とかゴキ魂ベルトとか、大人気だった。

でも、花子さんは帰らなかった。

帰りの運賃が……なかったから。

「……どうしよう」

るるるるーるーるーるー。

宇宙港で途方に暮れて目から涙とビームを飛ばしまくる花子さんに、一人の地球人が果敢に声をかけた。

「ねえ、お姉ちゃん。お茶しない？」

それが山岸道夫さんであった。

なんて優しい人だろうと、花子さんは思った。

困りすぎてたから軟派なやつだなんて思わなかった。

花子さんは、親が見てたら泣くくらいあっさりついて行った。

それから二人の交際が始まって。

「二人で、地球の平和を守ろう」

一ヶ月後に、道夫さんのプロポーズである。

「はい」

そのとき花子さんは思った。

地球に来て、良かった。

ゴキ魂ベルトも買えたし、テレビゲームも出来たし、漫画も読めたし、アニメも見れたし。

これぞ充実したライフ。

でも。今。

花子さんは落ち込んでいた。

自信を失っていた。

正義のヒロインになる自信なら今でもある。

変身ポーズも完璧に覚えている。

だけど奈々太ちゃんの母親をやっていく自信がなくなっていたのだ。

頑張ろうと思っていた。

異星でお母さんやるのも良いかもしれない。

そう思っていたのに。

でも現実には厳しかった。

奈々太ちゃんはチャンピオンシップ・ロードランナーを自力でクリアするよりも手強かった。

正直クリア不能の難易度だった。

懐くどころか目を合わせようともしてくれないのだ。

それどころか身体ごと全身全霊でもって視線を避けるのだ、シュバババって。

……花子さんは奈々太ちゃんと居るとき、かなりの高確率で茶色い光が洩れてしまうことに気づいていなかった。

「実家に帰えろっかなあー」

目から憂鬱色の光線を出し夕方のアニメ番組を見ながら、花子さんはいいいじばたばたといじけていた。

テレビの中の魔法少女は心持ち青白い顔で、もじもじしている。

「ただいまー」

玄関がガラって開いて、旦那の声がしてきた。

「あつ、道夫さんー」

花子さんは玄関目指してかけだした。
目からのビームも青く変わっていた。

玄関で、道夫さんが両手を広げて待っていた。

「愛してるよぉー、まいわいふ花子ちゃぁーん」
「おかえりなさい、だぁーりーん」

花子さんは抱きついてお帰りのキスをした。
抱き合ったままぐるんぐるん二人で廻る。

世界は二人。二人が世界。

何だかんだで、新婚さんである。

目からはピンク色のビームが出てた。

もう奈々太ちゃんの事も地球の平和も忘れていた。
こんな日が一週間も続いていた。

だから奈々太ちゃんは、この一週間、相談所で生活している。
学校にも相談所から通っていた。

一回目の家出の時には、すぐにおじいちゃんが迎えに来て帰った。
でも今はおじいちゃんが入院してるので、迎えにはこない。

あの日、奈々太とおじいちゃんは言葉もなく、二人並んで歩いて帰った。

夕日を背に浴びて、夕日に背を押されて。

奈々太とおじいちゃんの足下からは、長い影がゆらゆらと伸びていた。

俯いて、奈々太は自分の影だけをぼんやり見つめていた。

家をもうすぐそこまで迫ってから、初めておじいちゃんは奈々太に話しかけた。

「奈々太。おまいはルパン三世をしつちやるかね？」

奈々太は、立ち止まった。

俯いていた顔を上げて、きょとんと、おじいちゃんの顔を見上げた。

おじいちゃんも立ち止まって奈々太を見返していた。
とても優しく、それでいて真剣な表情だった。

「しつちやるかね？」

いつになく強い口調で、おじいちゃんは繰り返した。

「うん。知ってるよ」

だからどうしたの？ てな感じに奈々太は答えた。
でもちよっとおじいちゃんの気迫にひるんでいた。

「では、みねふじこをしつちやるかね？」

「知ってるけど」

「じゃは、わかるじやろ。ないすばでいーは何をしちよも許されるんじゃ」

その笑顔は、とても自信に溢れ、満ち足りたものであった。

「許されるんじゃひよ」

また二人はとぼとぼと歩き出した。

「おまいも早く立派なないすばでいーに成長しなしゃれ」

おじいちゃんはその後も家の玄関を潜るまで、独り言のように「成長しなしゃれ」と繰り返していた。

奈々太は別の意味でだけど、成長しなきゃいけないと感じていた。

そんなおじいちゃんは、間もなく花子さんの入浴を覗いた。

「あらやだ、お義父さんったら」

にこやかな声と表情だったけど、花子さんの目が粒子砲。

おじいちゃんだった黒炭を積んで走り去っていく救急車を見送りながら、奈々太はもう一度家出しようと決意した。

03 参観日がやってくる

2回目になる、奈々太ちゃんの家出が10日目に入ったある日。

「参観日？」

「そうよ。参観日」

相談所所長・坂本猫馬は、花子さんに会っていた。彼女も時間だけに期待しているわけではなかった。

二人が仲良くなれる方法を考えていた。

「さすがに、授業中なら奈々太ちゃんも逃げ出すことはないと思うし」

「それはそうだけど」

花子さんは気弱に俯いた。

眼から出る緑の光に、茶色が混じりつつある。

「逃げないけど、奈々太ちゃんは怒るんじゃないかなあ……」

あの子なら逃げるんじゃないかなあ、とも花子さんはちよっと思っていた。

「それにね。花子さん」

猫馬さんは、ふふふつと笑った。

「将がむかつくならまず馬を射ってスッキリしようって諺があるでしょ？ 参観日の目的は奈々太ちゃんより、奈々太ちゃんの友達や先生、保護者たちよ」

「べ、別に私、奈々太ちゃんにむかついてないですよ！ それにお友達とか襲撃してスッキリなんて——」

バタバタ両手を振って拒絶する花子さん。

「違う違う。ごめん、勘違いさせたね。ちょっとした『たとえ』だから地球の。奈々太ちゃんのお母さん知合いとお友達になっちゃえば、自然と奈々太ちゃんとの接点も増えるし、友達の友達は友達だからいつの間にか奈々太ちゃんとも友達のわ！」

「ううーん？」

いまいち理解できず、微妙な感じに首を傾げる花子さんである。

「とにかくやるわよ。名付けて『だれ？ あん若くて格好いい女の人？ えっ、奈々太ちゃんのお母さんなの？ えー、すごい、羨ましいなあ。私のお母さんなんてデブでチビでハゲで足くさくって……』 大作戦！ これで奈々太ちゃんも花子さんにぞっこんね」

「……大丈夫かなあ」

花子さんの心配はもつともではあるが。

彼女もこのままではいけないと思い悩んでいたのだからやる気になった。

参観日までの一週間。

花子さんは、猫馬さんの指導の元、地球にふさわしい色んなポーズや笑い方、挨拶の仕方をマスターしていった。

「……暑い」

お昼休み。

奈々太は机にぐでーと突っ伏していた。

「ねえ、奈々太ちゃん家、お父さんが来るの？ お母さんが来るの？」

奈々太と一緒に弁当を食べていた霧咲アヤメちゃんは、食べ終わったお弁当箱を包みながら、出来るだけさりげない風を装いつつも失敗してしまった感じてたずねた。

「お母さんイナイ。どっちもコナイ」

机に突っ伏したまま、奈々太は片言っぽく答えた。

「奈々太ちゃん、家族の人に参観日のこと、伝えてないの？」

「どうだったかなあ」

「奈々太ちゃん、ちゃんとお家に帰ってる？」

「帰ってるよー。毎日」

「うそだよね？」

にこーとアヤメちゃんが笑った。

彼女は奈々太が相談所から学校に通っていることを知っていた。いつも一緒に登校してるから。

気弱に笑い返しながら、「わたしのお家はもう相談所なのだよ、アヤメくん」と心の中で奈々太は言い訳した。

アヤメちゃんはお顔を机と水平にして、奈々太の瞳をじっと覗き込んで。

「奈々太ちゃん、花子さんのこと嫌い？」

「キライ」

「わたしは羨ましいなって思ってたんだけど。お姉さん欲しかったから」

奈々太だってお姉さんは欲しかった。

馬鹿な兄貴じゃなくて。

でも、

「わたしは妹が欲しかったなー」

「えー、うそでしょ。欲しいならあげるよ？ どれでも？ 3人までなら」

アヤメちゃんの家には、可愛くて危険な妹が7人も居るのだ。

「いいの？ 貰うよ？」

「いいよ。大変だよ？」

そりゃ、大変だとは思う。

遊びに行ったときに体感した。

なんか判らないうちに奈々太は囲まれて蹴られていた。

2時間くらいバトルに明け暮れた。

奈々太は彼女たちのことをレックスと名付けた。

「ねえ、何で花子さんのこと、嫌いななの？」

アヤメちゃんは、逸れた話が一段落すると、必ず元の話題に戻してくる。

あんな妹を7人も世話してる影響だろうか、妥協しない子に育ってしまった。

「中西はお子様だからな。お父ちゃん。わたしを捨てないで〜」
ちよつと離れた窓際の席から、男の子が大きな声で会話に入ってきた。

「あんたもナイスバディーに騙された口？ イヤらしいーんだあ」
奈々太は半分、アヤメちゃんに話しかけるように、大きな声で言った。

「ばつ、ばか。違うよ！」

真っ赤な顔で男の子は椅子をガタツと鳴らして立ち上がった。
北島くんは、アヤメちゃんに気があったのだった。
だから聞き耳立てて話に入ってきたのだ。

奈々太のふふふんって感じの笑いに、北島くんは舌打ち一つを残して、真っ赤な顔で、廊下に逃げていった。
誰が好きかを悟られた者は、ファンタジーで言う 真の名 を知られたように、この世界（学校）では生きていけないのである。

「花子さんと仲直りしなきゃ駄目だよ？」

……アヤメちゃんは、うやむやにはしてくれない。

「うん」

奈々太は突っ伏したまま、答えた。

アヤメちゃんは「よしよし」とお姉さんのように笑って、下敷きで扇いでくれた。

涼しかった。とても。

でも奈々太は「わたしが大人になったらね」と心の中で呟いてい

た。

職員室では、好戦的な作文を前にして、新任教師の五十嵐優子が、
途方に暮れていた。

うちのお母さん

3年1組 山岸奈々太

お父さんが、ないすばでいーと再婚した。

わたしは認めない。

お兄ちゃんが認めても。

おじいちゃんが認めても。

おばあちゃんが認めても。

政府の人が認めても。

アヤメちゃんが認めても。

わたしは認めない。

みんなみんな、ないすばでいーに騙されてるんだ。

わたしは絶対に騙されないし。

認めない。

これじゃ作文でなく宣戦布告である。

作文のタイトル「うちのお母さん」は、全校生徒共通であった。
タイトルは校長先生が決めた。

いい迷惑だぞ。あの禿じじいめ。

校長室の方向に向かい、優子先生はふあつくゆーの形に指を曲げて、さらに顎もしゃくれさせた。

優子先生はストレスがたまる前に、こまめに発散させていくタイプである。

どうしようかなあ。

この作文、一週間後の参観日で使うことになっているのに。奈々太ちゃんだって知っているはずなのに。もうちょつと空気を読んで書いて欲しかった。

その辺の大人の事情も説明して奈々太ちゃんと話し合っべきか。この作文、タイトル以外にはお母さんが含まれていないし。その辺りから、やんわりと書き直しを求めて見ようかな。でも奈々太ちゃんは強情なところがあるからなあ。

うちのお母さん

3年1組 山岸奈々太

お父さんが、ないすばでーな お母さん と再婚した。
わたしは お母さん と認めない。

お兄ちゃんが お母さん と認めても。

おじいちゃんが お母さん と認めても。

おばあちゃんが お母さん と認めても。

政府の人が お母さん と認めても。

アヤメちゃんが奈々太の お母さん と認めても。

わたしは お母さん と認めない。

みんなみんな、花子さんのないすばでいーに騙されてるんだ。
わたしは絶対に 花子さんのないすばでいーに騙されないし。

お母さん とは認めない。

奈々太ちゃんならこんな作文になって帰ってきそうな予感という
か悪寒がした。

奈々太ちゃんより、まずはご両親と話し合うべきかもしれない。
しかし新任教師がご家庭の事情に踏み込むのは躊躇される。
まして新婚熱々のご家庭になんて。
しかもファンクラブまである美人さんの新婚家庭になんて。

五十嵐優子先生は、淡く切ない失恋をしたばかりであつた。

「しょーがないか」

先生は決心した。

「見なかったことにしよう」

気軽に作文を脇にどけた。再婚するヤツが悪いんだもん。

「読ませなきゃ良いだけだし」

新任教師の五十嵐優子嬢も、やはり殺伐とした世の中を生きる小
市民の一人だつた。

優子先生は生徒の作文を手早くチェックしながら、参観日で読ま
せても良い作文と駄目な作文、多少の修正で使えそうな作文を振り
分けていった。

しかし一件残らず子供連れで宇宙人の造ったムー大陸に移住してくるような家庭だ。

ぶっちゃけ訳ありや奇人変人が多いので、「お前らもうちょっとお母さん選べよ」ってくらいデンジャーな内容の作文が多かった。

……この作文の登場人物たちが、参観日に来るのだろうか？

どうやら、手強い授業参観になりそうだと、優子先生は感じていた。

大多数の地球人が宇宙人と出会って、まだ数年しか経っていなかった。

それほど沢山の宇宙人が地球に来たわけではないし、殆どはムー大陸の首都・ムータンシティか、彼らだけのコロニーに居住していた。

だから、亀山町にも、ムー大陸にある他の地球人が造った町にも、それほど多くの宇宙人が生活しているわけではなかった。

地球人たちはまだ、宇宙人を理解しては居なかった。

スターコンフリクト ピックアップ ヒックバン
星の葛藤が引き起こす惨事の凄まじさを、理解してはいなかったのだ。

銀河宙立特務機関・亀山相談所の相談員たちも、そのことを理解し切れては居なかったのだ。

くすぶっていた星の葛藤は、
スターコンフリクト

亀山小学校有史（創立5年目）最大の大惨事を招くことになる。

04 参観日の惨劇

参観日がやって来た。

花子さんは、気合いが入っていた。

ダークグレーのスーツ姿だ。

とても似合っていた。

猫馬さんから借りた服であるが、真新しくサイズまでが何故かぴったりだった。

それ以上に気合いが入っていたのは付き添いの猫馬さんで、全身を覆う ペンギンの着ぐるみ を着込んでいた。

着ぐるみの上から、『相談上等』と赤字で大書されたタスキをかけている。

「……暑いわね」

今にも死にそうに猫馬さんが呟いた。

気合いが入っていたのは服装だけであつた。

ペンギンのくちばし部分から、頭部を完全に外に出している。

死にかけたペンギンが死にかけた人間を食べる途中に、疲れ果ててへこたれたみたいになっていた。

黄金に染めたポニーテールは、汗を含んで、金色の墨を浸した筆みたいになっていた。

「燃えちゃいますね」

一週間の修行を積んで生まれ変わった気になっている花子さんは、

ちゃんとした意味で熱くなっている。

眼は怒りではなく興奮でめらめら燃えていた。

そんな二人はずんずんだらだと廊下を進んでいった。

廊下は空いていた。

何故ならすでに授業が始まっているから。

万が一にも奈々太ちゃんが花子さんを見て逃げないように、二人は車の中で時間を潰し、鐘が鳴ってから校舎に侵入したのである。

猫馬さん的には車の冷房から離れがたかったせいもある。

目指すべき教室のドアは、後方だけ開けられていた。

だから二人はそこから攻めることにした。

もちろん、父兄が授業中に前方から入ったら怒られる。

花子さんは、一週間の修行でマスターした猫馬直伝『七色の微笑み』の一つ『おやじ殺し』を浮かべて、保護者の列に割って入った。猫馬さんは「あづい」と呟いてから、花子さんの後に続いた。

暑苦しいペンギンの襲来に、保護者の列が、ぎよぎよと割れた。

「あつ、居た。あそこです、あそこ」

花子さんは奈々太ちゃんを見つけると、ペンギンの腕……というか、ひれを引っ張りながら、猫馬さんに耳打ちした。

「……あづい」

と猫馬さんは答えた。

ぼたぼたと汗を垂らしながら。

花子さんの指さす先で、奈々太ちゃんは、ぐでーと机の上に突っ伏していた。

「奈々太ちゃん、奈々太ちゃん」

小声で囁いて、奈々太の後ろの席のアイメちゃんが、ぐでーと机との一体感を堪能している奈々太ちゃんの服を引っ張った。

アイメちゃんは、振り返らない限り永遠に引っ張り続けるタイプの女の子である。

仕方ないから奈々太ちゃんは、のっそりと顔を机から離して、振り返った。

奈々太は、アイメちゃんがにこにここと指さしている方を見た。

「あうっ」

少しびくつとして、眠気を吹っ飛ばす。

死にかけた変なペンギンが、猫馬さんを食べていた。……よく見たら着ぐるみを来ているだけだった。

その横に花子さんが居た。

花子さんは奈々太ちゃんに向かって手を振り、微笑みかけた。目の色は青かった。

それは花子さんが猫馬さんから教わった『七色の笑顔』の一つで『奈々太殺し』と名付けられた技だったが、奈々太ちゃんは、ぶいて顔を背けて。机にぐでーとフィットした。

瞬間に。

花子さんは、悲しくなった。

この一週間、何してたんだろう？

何で、上手く行く気になっていたんだろう？

花子さんの瞳からは、涙があふれ出た。

茶色の光線も、あふれ出てた。

花子さんの死角にいたごく一部の保護者を除いて、光線は人々を舐め尽くしていった。

坂本猫馬もそれを浴びた。

二秒後。窓際に置かれた水槽の金魚たちが、ぼとぼと糞を落とし始めた。

そうもいかない人間たちは、唐突に訪れた便意にとまどい、為す術もなく神に許しを請うていた。

教室内に、「担任の先生が痴漢で掴まりました」なんて言われてもたどり着けないくらい陰惨な空気が吹き荒れていた。

五秒後。

猫馬さんは携帯電話を取り出し、電話が掛かってきた振りをして、イソイソと廊下に逃れ出た。

ペンギンは廊下に出ると、「うおおおおっ」驚異的な素早さで駆けだした。

それを切っ掛けに、保護者たちがぼつりぼつりと廊下へと流れ始めた。

うんこビーム大爆発から、8秒後。
優子先生は叫んだ。

「自習にします！」

そして、父兄児童合同参加の、便器捕り合戦が始まったのである。
フライングした保護者たちを除いてもっともリードしたのは、優子先生である。

叫んだときには教科書を教卓に放り投げて扉を引き開け、廊下へと飛び出している。

彼女が目指すは一階・職員室横にある職員用トイレ。

前の方の座席に座っていた生徒たちも、混み合わない前方のドアから出撃。

教室と同じ2階にあるトイレは、すでにフライングした大人たちに占拠されていたので、彼らは3階、1階のトイレへ旅立っていた。

しかしトイレは、各階に4つ、もちろん隣の校舎にも同数のトイレがあるし、職員トイレや来賓トイレなど特殊なトイレもある。

部室棟やプールにもささやかなトイレット。それでも、併せて30に満たないトイレ。

まるで救命ボートの足りない難破船である。

あちこちで大変でした。

大変その1・隣校舎の1階・便所前。

「待て！ 北島！」

トイレに駆け込もうとした北島くんの肩を、学級委員長の中島くんが掴んだ。

「放せ！ 漏れる！ おまえの分もあいてるよ〜〜！」
北島くんは内股で殴るように拳を振り上げ、中島くんの呪縛を振りほどいた。

北島くんが 隣校舎1階レース のポールポジションで、中島くんは二番手。

どちらも生きる権利を有していた。

しかし中島くんは、ゴールすることなく、両手を広げて男子トイレ前に立ちふさがった。

北島くんを初め、押し寄せる男子たちは幸福のシエルターを前にして、立ち止まらざるを得なかった。

彼らの脇を走り抜けて、女の子たちは女子トイレに駆け込んでいく。

「どけよ！ 中島！」

「どいてくれ！」

詰め寄る彼らに対して。

「譲ろう」

苦しげに中島くんは告げた。

「男子便所も、女の子に譲ろうじゃないか！」

中島くんの言葉を聞いて、北島くんたちは周りを見渡した。

ああ、なんということであろう。

クラスで一番人気のある霧咲アヤメちゃんがもじもじと女子トイレ

レの前で立ちつくしているではないか！ 彼女は人生という戦いに敗れさったのだ！。

「ああ、譲ろう」

北島くんは、即座に同意した。

他の男子も同意した。誰も彼女の決壊なんて、小学生だけに見たくなかった。

「このトイレは女子たちが使ってくれ！」

高々に、北島くんが宣言した。

世に名高い『B校舎1階トイレ前北島宣言』である。

「ありがとう！ 北島くん、中島くん、男の子たち！」

アヤメちゃんが、かつて見せたことのない脂汗流して引きつって、でもちよつと良い笑顔でお辞儀しつつ、忍者走りですぐに駆け込んで行く。

続けて他の女子生徒たちが男子トイレに駆け込んでいく。それを見送り。

「だが、俺たちはどうするんだ？」

五人の英雄たち。彼らももう限界だった。

新たな新天地を目指すだけの余力など無かったし、開いている便器があるとは思えない。

中島くんは、中庭を指さした。

「俺たちには、中庭があるじゃないか」

中島くんの表情は、まるで聖職者のようだった。

五人の英雄たちは、中島くんに導かれるまま、約束の地・中庭の

草むらに籠もって、漢となった。

大変その2・隣校舎の3階。

「おれさ、下痢に効くツボ知ってるんだ」

「え？ まじで？ 教えてくれよ！」

「支溝しこうって言つてさ、どんな下痢にも効く 下痢の名穴 って言われてるんだぜ？ この辺をこうやって親指で……」

「うわああー！ー！ー！ー！ お腹が！ お腹が！」

支溝は、下痢ではなく、便秘のツボだった。

武田君のあだ名がアミバ様になった瞬間である。

とにかく、亀山小学校うんこ事件である。
学校は、かつて無いほど、匂い立った。

05 珍味くん、走る

惨劇の後、新任教師の五十嵐優子は、授業参観を中止して生徒たちにも家に帰るように指示した。

その後、校長室に呼ばれてHANAKO LOVEの鉢巻きをした校長から、ちょっと納得のいかないお説教をされた。窓際にはくさいズボンが乾してあった。

花子ファンクラブ会長の校長先生は、3年1組の授業を覗きに來ていた。

優子先生はお説教を聞きながら心の中でうるさい禿、むしるぞ禿と20数回繰り返していた。

だから奈々太ちゃんが居なくなつたことに気付かなかった。

アヤメちゃんも、「豪快にされど繊細に小便器にぶちかましてやったさ」と豪語する政治家の父を、何とか学校から、みんなの視線から排除したかったので、奈々太ちゃんを探す余裕は無かった。

猫馬さんも花子さんを伴い愛車の黒いマークツーに搭乗して学校を脱出、奈々太ちゃんにまで手が回らなかった。

学校に居た人は、みんな自分たちのことで精一杯。

だから授業の終わり頃を見計らって、奈々太ちゃんを迎えに來た珍味くんは困っていた。

何が起つたのかはある程度想像できた。

でも奈々太ちゃんが何処に行ったのか判らない。

もちろん学校にも居ないし、学校の横のいつもの公園にも居ない。

相談所にも、実家にも帰った形跡がない。

思い当たる場所を駆け回った珍味くんは、手がかりを得られないままに相談所に戻って来た。

みんなと相談するために。

相談員たちの力を借りるために。

その時には昼の二時を回っていた。

事件発生より1時間25分後が経過していた。

事件の噂はうつすらと、亀山町に広まりつつあった。

『大変やー！ 奈々太が！ 奈々太が行方不明やあー！』

叫んで、珍味君が猫なりに相談所に飛び込んだ時、

「うーん、まさかあれほどの威力とは。管理人さんから貰ったファイルには、マズルドーマ光線の危険度は地球人に対して『僅少』って書いてあったのに。花子さんって凄腕なのかしら」

感心しきりと言った感で、ペンギンさんが悩ましげに身を揉んでいた。

「でもさ、ちょっとお腹がすっきりしたし。これはこれで……」
ペンギンさんは、そっとお腹を押さえた。

『それどころやない！ 奈々太が行方不明や！ 行方不明なんや！ 早く探さんと行方不明なんやあー！』

珍味君はペンギンの前に回り込んで叫んだ。
ペンギンのクチバシから半分、猫馬さんの顔が飛び出していた。

「あつ、珍味君おはよー。所長はそれで納得でも、漏らした人はそれどころじゃないですよー。私だったら傷心のあまり世界一周旅行に三周くらい行っちゃいますよ？」

あははははつと明るく笑ったのは、現役女子高生にして相談員を勤める珊瑚である。

彼女は今、ボンバーマンに首つ丈だった。
だから両手にはコントローラーががちり握られていた。

『おはよう珊瑚。ってもう昼過ぎてるやん！』

珍味君は挨拶してから突っ込んで、

『奈々太が行方不明や！一刻を争う事態やで！』

猫っぽくじたばたした。

「まあ、ねえ。……鈍くさいやつっているのよねー」

はあやだやだ、と猫馬さんはため息と一緒に暴言を吐いた。
冷えたコーラをぐびぐびと飲む。

「とりあえずさ、食中毒で処理しない？」

猫馬さんは、うちわでクチバシの中を扇ぎながら、げふうと続けて二酸化炭素を吐いた。

「無理だと思えますよー。花子さんはご町内の有名人ですもん。マズルドーマ視線光のこともそこそこ知られてますからねえ」

こちらはアイスコーヒーを飲みながら、珊瑚。

「まあ……でも……きっと大丈夫よ。なんとかなる。なんとかなる」
言って猫馬さんはクーラーのリモコンを手にとって、下げるを3回押した。

でも設定温度はすでに16度になっていて、下がらなかった。だから猫馬んはちょっと不機嫌に、
「だいたいさ。ムー大陸に住むんだからさ。あれくらいのことはみんな覚悟してるでしょ？」

「そうかなー」

珊瑚はボンバーしながら、ペンギンに異を唱えた。

「ちょっとやさつとやかなりのことくらい大丈夫です！ 私も小学校の時、男子にうんこ漏らさせたことあるけど大丈夫でした！」

猫馬さんが怒ったように答える。

珍味君は猫なりに前足を合わせて男の子に黙祷を捧げた。

「酷い話ですね、あははは」

けたけたと珊瑚が笑っている。

『……おまえら少しはまじめに猫の話を聞いてくれんと、膝の上にうんこするぞ？』

珍味くんが脅した。

「やだなー。珍味くん。そんなことしたら爆殺しちゃうぞ？」

珊瑚があつさり脅し返した。

画面では爆弾が次々と誘発して、ボンバーマンごと猛爆していた。

『……頼むからまじめに話を聞いてください』

猫なりに頭を下げてお願いする。

「聞いてるわよ」

真剣な顔をしてペンギンさんが言った。

「あのね、珍味くん」

そして真摯な眼で珍味くんを正面から見つめる。

「いま、いちばん大切なこと、君は見失ってない？」

『た、大切なこと？』

こくん、と猫馬さんがうなずいた。

「いい？ 相談員として、いま、私たちがしなければいけないことはね」

『いけないことは？』

「大切なのは、この事件をどう解決して上げるか、でしょ？」

猫馬さんが首をかしげて微笑んだ。

『……たしかにそうやけど。しかし、奈々太が……』

珍味くんはうめいた。

「どう、誤魔化すか、どう、なあなあにするか、そうじゃない？」

『いや、それは違うやろ？』

「違うの？」

猫馬さんは、猫の縦長の瞳孔を、正面からのぞき込む。

『……いや、違うやろ……。違う、やん？……。そう、違う……。でも、そうかもしれへん。……。ああ、そうかもしれへんな』

あまりに真剣な猫馬さんの視線に、所詮は猫だから珍味くんは懊悩した。

「でもまあ、それは私たちが考えるから、珍味くんは、珍味君が今しなければならぬことに専念してちょうだいな。奈々太ちゃんを探すんでしょ？」

『おう、そうやった！』

ぱあっと珍味君の顔が晴れやかに輝いた。

「頑張つてね」

『おう、任せとけ！』

力強く珍味くんは飛び出していった。力強く。力強く。

でも、20歩くらい駆けてから、猫は少し釈然としない感じで首を傾げた。

「いいんですか？」

相談所の中で、珊瑚が画面から所長に視線を移した。

「私たちまで奈々太ちゃんを捜し回っていたら、まるで彼女が悪いことしたみたいじゃない？」

猫馬さんは右手で豪快に開けたクチバシの中を扇ぎながら、力弱く、にっこり微笑んだ。

「まあ、そうですねー」

相談所員は、特に所長の猫馬さんは有名人で、町を歩くだけで、特にトラブル時はとてつもなく注目されてしまう人だった。

そんな人が奈々太ちゃんを捜し回れば、彼女まで注目されてしまうことになる。

「それに、奈々太ちゃんは、きつとわたしたちより珍味くんに見つけて欲しいと思ってるわ。あまり早く見つけてあげるのも善し悪しだし……ね。それに、暑いし。珍味くんに任せましようよ、暑いし」

「……そんなに暑いなら戦闘服を脱いだらどうですか？」
珊瑚が冷ややかに言った。

猫馬さんが帰ってきてエアコンの設定温度が10度も下げられたため、珊瑚は長袖の上着を羽織っていた。

「だって、せっかく手に入ったのに。使う機会無かったし。お披露目にはちょうど良かったから。暑いけど、でも、お洒落に犠牲はつきものなのよ、うん どう？ 良いでしょ？ かなり良いでしょ？」

嬉しそうに、くるりと回って見せる。

このペンギンは、1ヶ月前に管理人さんを説得して手に入れた水陸両用の特殊強化服だった。

弾丸凶刃どんとこいで、熊とも殴り合える性能。

オプションを装備すれば、宇宙戦もこなせる優れものだ。……ただし、冷暖房機能が、付いていなかった。

「良いとも思えないですし、お洒落が犠牲になってますって。見るだけで熱いっす」

珊瑚の指摘に、猫馬さんはぶすーとふくれていたけど……ぷいっとそっぽを向いてから、ペンギンのクチバシの中に、お顔を戻した。

ロックして、完全装備状態になると、2階へと上がっていった。

06 地球防衛軍、登場

「管理人さんに突き返して冷暖房完備して貰わないと。まあでも、試用しといて良かったわ。本番でコレだと洒落にならないっつーの」

ぶつぶつ文句を言いながら、クチバシを閉じたペンギンが、よたよたと階段を上がる。

猫馬さんは、奈々太ちゃんについては本当に心配していなかった。彼女自身が何かをしたわけじゃないし、頼りになる親友もいる。それに珍味君は騒いでるけど、まだ昼の三時にもなっていない。あれだけの騒ぎがあった後だ。すんなり帰って来る方がどうかしている。

個人差はあるけど、あの年頃の普通の女の子なら、たぶん、隣の町の公園くらいで黄昏れてるだろう。

その位が、ちょうど生活圏の外側だし、校区外だから、知り合いと会う可能性も少ない。

該当する公園に優先順位を付けて、5時を過ぎたくらいに、珍味君を派遣すればいい。

この事件と、一人きりの数時間。

彼女自身のこと、花子さんのこと、家族のこと、事件のこと。

奈々太ちゃんにとっては、色んな事を考えるのに必要な時間だ。

素早く見つけて取り上げない方が、彼女の成長の為になる。

もし、6時を過ぎても珍味君が見つけれないようなら、飛空艇エルドラドを使えばいい。

管理人さんと交渉して手に入れた飛空艇エルドラドなら、50キロ圏内を数分で探査できる。

だから猫馬さんは、奈々太ちゃんについては本当に心配していなかった。

「起きてる？」

猫馬さんは、ペンギンのひれで、花子さんが休んでいる客間のドアを、そつと叩いた。

「……………」

返事はなかった。

僅かに中で動く気配はしたけれど。

猫馬さんは、小さく口の中だけで、ため息をついた。

奈々太ちゃんを保護する前に、少し花子さんと話をしておきたかった——けれど。

（まだ、早いか）

彼女にも、一人で考える時間が必要なかもしれない。

猫馬さんは、そつと、ドアから離れた。

ワザと室内に聞こえる程度の小さな音を立て、階段を降りる。降りながら、ペンギンのクチバシを開いて、汗まみれの顔を出す。

マズルドーマ人は、視線光によってかなり微妙な感情まで伝えあうことが出来る。

だからマズルドーマ人同士は、相手の気持ちを、誤解することはなかった。

目と目で語り合えば、自分が愛されているのか、嫌われているのか、それはまさしく一目瞭然なのである。

数百年近くになる異星人との交流期間や、遠距離通信の発達もあり、身振り手振りで感情を伝えることも身につけてはいるが、視線光と言う確実なコミュニケーション手段を持った彼らは、やはり腹の探り合いが苦手だった。

だから、星外でのマズルドーマ人は、不必要に疑り深かったり、あつさり人を信じたりと、両極端になりやすい。

星外に出たマズルドーマ人が最初に乗り越えなければならない星の葛藤は、伝わらない心に順応し、信じ、疑い、割り切りながら、受け入れることだった。

マズルドーマ人の約4割は、それを克服することが出来ず、何時になっても相手の本当の気持ちを知り得ないことに疑心暗鬼になり、自分の気持ちを伝えきれないことに絶望し、母星に返ることになる。

「どうしたもんかねえ」

階段を下りきってから、猫馬さんは力なく呟いた。

マズルドーマ人特有の星の葛藤については、あの夫婦に限っては大丈夫だろうと、猫馬さんは信じていた。

後は奈々太ちゃんと分かり合うだけ。

その相談相手は未婚の自分よりも奈々太ちゃんと同じ歳の子供を持つ大人が最適、と思つて参観日に連れ出したのだが。

「それが、こんな事になるとはねえ」

実は猫馬さんは、過去に何人かのマズルドーマ人と出会っていた。その誰一人として、これほど強力な視線光を有する者は居なかった。

押さえに押さえていた感情が爆発した結果か、それとも花子さんが特に感情豊かなのか。

「それはそれとして」

すでに事件は起こってしまったのだ。

起こった事件を無かったことにする方法など、この世にはない。

しかし、薄めることなら出来る。

どんな傷も、どんな悲劇も。

「何とか、しなきゃね」

階段の一番下の段に座り、猫馬さんは、ペンギンのひれで、階段をぺちぺち叩く。

とにかく、考える。

詭弁だろうと何だろうと、少しでもみんなの、花子さんだけでなく事件に係わったみんなの傷口を薄める方法を。

諦めるつもりはなかった。

諦めたらそこでゲームセットだと、カーネルサンダースも言っていたような気がする。

意地でも何とかしてやるつもりだった。

亀山相談所所長・坂本猫馬の名にかけて。

一度相談を受けた以上、何としてでもこの事件を解決してやろうと。

彼女がこの町に住めるように。みんなと仲良く住めるように。

相談員として。友達として。

猫馬さんは固く決意するのであった。

……何も思いつきはしなかったけど。

階段で黄昏れ、汗をだくだく流しながら、決意だけはするのであ

った。

3時35分。

隣町の公園で。

ぎりぎりぎり山岸奈々太はブランコを揺すっていた。

これから、どうなるんだろう？

私は？ 花子さんは？

奈々太には想像もつかなかった。

ただ、もう学校に行けないことは理解していた。

決してうんこ臭いから行きたくない、と言うわがままな気持ちからではなかった。

花子さんのせいで、奈々太のせいで、山岸家のせいで、あんなことになったのだから。

花子さんだつて、亀山町には住めないだろう。

きつと、マズルドーマ星に帰るんだ。

そう思うと、無性に寂しくなった。

お父さんはどうするんだろう？

「花子さんと一緒に行くに決まってる。でれりと鼻の下を伸ばして」
奈々太は呟いた。

でも、奈々太には分かっていた。

きつとお父さんは、残るだろうと。

奈々太を捨てては、何処にも行かないだろうと。花子さんと別れて

でも。ムー大陸に移住してきた時のように。

奈々太は、悔しくてやるせなくて、泣いた。
ブランコを揺すりながら。

このまま花子さんが居なくなつて、自分も亀山町に住めなくなる。
みんなと会えなくなる。

お父さんの再婚に反対なわけじゃなかった。

お母さんだつて許してくれるだろう。

別に死んだわけじゃなく、若い男とハワイに逃げただけなんだから。

花子さんも嫌いじゃなかった。

一目見たときに綺麗な人だなつて思った。

馬鹿な兄貴じゃなく、こんなお姉さんがずっと欲しかった。

なのに奈々太は花子さんに意地悪ばかりした。

宇宙人だつてことには驚いたけど、黒くない船が来てからずっと
宇宙人とは友達になりたいと思つていた。

ムー大陸に引越して来て、珍味くんと友達になつた今は、もつ
ともつと沢山の宇宙人と友達になりたいと思つている。

なのに奈々太は花子さんに意地悪ばかりした。

茶色いビームにはたまげたけど、哀しい思いをさせなければ、飛
んでこないことはすぐに判つた。

なのに奈々太は意地悪ばかりした。

最初は、かまって欲しかったから。

家出だって本気じゃなかった。

花子さんとお父さんに、みんなにこっちを向いて欲しかっただけ。方法は何でも良かった。

家出以外、思いつかなかっただけ。

奈々太は思いを馳せる。

家出した、あの夜のこと。

窓から漏れるカーテン越しの家々の灯り。

シャッターの下りた商店。

街灯の明かりと、意外と明るい夜の信号機の灯り。

自動車も歩行者も少ない横断歩道。青になったら一気に駆け渡つて。

何度か歩いたことがあった、夜の町。

お父さんや、おじいちゃんや、友達と。

だけど、初めての家出。たった一人。

夜の町が、いつもと違う夜の顔をしていた。

気分が不思議に高揚して。でも、ちょっと不安で。

いつもの公園。

だけど夜の公園。

街灯の下のベンチで。

コンビニのおにぎり。ドキドキと頬張り。

通りがかった猫。立ち止まった猫。

伺うように猫。隣に座った猫。

おにぎりが欲しいのかな？ ドキドキと差し出したら。

『どないしたんや？ 迷子か？』

人の言葉を喋る猫。

おにぎりを頬張りながら。宇宙から来た猫。珍味くん。

猫に連れられ、夜の町をまた歩いて。

亀山相談所。

相談所の人たち。猫馬さんや京子さん。

一緒に夜更かしして。

知らない話。楽しい話。宇宙の話。

わくわくした。

どこまでも。

凄く大人になった。なれた気がした。特別な人になった気がした。

お父さんが再婚した。

それも宇宙人と。

だから私は相談所に行く資格があつた。

いつでも行つて良かった。

可哀相な女の子だから、みんなが優しくしてくれる。

私は相談所が大好きで。

だから私は花子さんをいじめた。

相談所に行くために。

花子さんを理由にして。

私は家出を楽しんでいたんだ。

ぼろぼろと、奈々太は涙をこぼした。

私は、これからどうしたらいいんだろう？

花子さんに？ 学校みんなに？

奈々太には想像もつかなかった。

想像したくもなかった。

隣の公園で。

奈々太は俯き、泣きながら、ぎこりぎこりとブランコを揺すっていた。

だから隣のブランコが動き出すまで、奈々太はその男の人に、全く気がつかなかった。

「お嬢ちゃん、ハンカチ、使つかい？」

男の人も、ぎこりぎこりとブランコを揺すりながら、話しかけてきた。

服の肩口で涙を拭い、奈々太は男の人を見上げた。

背広を着て、ぴつちりとした髪型をして、眼鏡を掛けた、知らないおじさん。

奈々太に向かい、ハンカチを差し出してる。

「ああ、おじさんかい？ おじさんはね」

男の人は奈々太が受け取ろうとしないハンカチをしまいながら、明るく笑った。

「侵略者からこの星を守っているんだ」

奈々太は少しずつブランコの揺れを小さくして、走れる準備をして。

「……侵略者？」

「そう、侵略者、つまり宇宙人からこの星を守ってるんだよ」

「……おじさん、地球防衛軍？」

こわばった表情で、奈々太は訊ねた。

「そう。地球防衛軍。おじさんは駒田明春。階級は少佐だよ」

奈々太のブランコはすでに止まっていた。
逃げようと奈々太は思った。

でも男の人のブランコも止まっていた。奈々太の足は動かなかつた。

「……」

「……」

「大変だったね」

男の人は、緩やかな声で、奈々太をいたわった。

「何が？」

奈々太は前を向いたまま訊ねた。

「学校」

「知ってるの？」

「うん」

きつと凄い騒ぎになっているのだろう。

奈々太が学校を飛び出すときにも、すでに阿鼻叫喚が渦巻いていた。

サイレンとか鳴っていた。

奈々太はまた涙ぐんで俯いた。

「知っているよ。何故なら彼はその場にいたからね」

男の人はずっと優しい声を保ったまま、砂場の方を指さした。

そこでは、真夏の太陽が反射して、とてもキラキラ輝いていた。
キラキラ、キラキラ、と。

「……橋本くんのお父さん？」

奈々太の声に、砂場で体育座りしているカップミみたいな特徴的な頭をした男は、奈々太に顔を向け、へらへらと笑って。

酒瓶をにかけて。キラキラ。

「やあ、奈々太ちゃん。君も飲みたいのかい？」

「え……。いや、あの」

「気にしないでくれ。中佐は少し疲れているんだ」

「そ、そうですか。中佐なんですか」

「2階級特進してね」

駒田少佐が、苦笑気味に答えた。

橋本くんのお父さんの顔と頭頂は、とても赤く、かなり酔っているようだった。

その傍に、呆れたような表情をした、地球愛、と大きくプリントされたTシャツを着た、女の人が立っていた。

その人は橋本君のお父さんの頭を、こつんと叩いて、それから、奈々太の視線に気づくと、微笑んで手を振ってきた。

彼女も、知らない人だった。

奈々太は公園を見回した。

他にも3人の大人の姿があつた。

彼らは奈々太が公園内を見回した後、ゆっくりと集まってきた。

奈々太が最初に思ったことは、怖い、ということだった。

その後に、仕返しされるのかな、と考えた。

学校で、みんなに酷いことをした仕返しを。

奈々太の隣でブランコに乗っていた男の人が立ち上がり、うーん、と背伸びをした。

それから、奈々太と顔の高さが合うくらいまで、身を屈め、手を伸ばせば、触れることの出来る位置で。

奈々太の真横で、わざとらしいほど大きく微笑んで、奈々太に囁きかけた。

「あのエイリアンに仕返ししよう。協力して欲しいんだ」

「……エイリアン？」

ぼんやりと、奈々太は聞き返した。

男の人と視線を合わせないように、顔は正面を向いたまま。離れた地面を見つめながら。

「そう、エイリアンだ」

花子さんのことだ、と奈々太は理解していた。でも奈々太は黙っていた。

「君は今まで一人でよく戦った。偉かったね」

男の人は手を伸ばして、奈々太の頭を撫でた。

奈々太は少しびくりと身をすくませて。

嫌だったけど、じっとしていた。

「おじさんたちが来たからにはもう大丈夫だよ。おじさんたちに任せておくれ。お嬢ちゃんを苦しめるエイリアンを、君の家から追い出してあげるから」

奈々太は時間を掛けて、出来るだけ普通の声を絞り出した。

「……どうやって？」

でも、声は擦れていた。

男の人はしばらく奈々太を見つめていた。

気配でわかる。

でも奈々太は正面を見ていたので、細かい表情までは判らなかった。

「みんなに知って貰うんだよ。エイリアンのやったことを。あいつが学校でやった酷いことを。君の家族にしたことを。みんながどれだけ苦しんだか、君がどれだけ苦しんだかを。そうすればきっとみんなも同じ気持ちになってくれる。戦う気持ちになってくれる」

詩を読むように優しい声で。

だけど奈々太は新聞やテレビで知っていた。

地球防衛軍が世界中で過激な事件を起こすことを。

全ての宇宙人たちを追い出そうとしていることを。

だから奈々太は勇気を振り絞って。

「でも。……でも、良い宇宙人もいっぱい居るし……ムー大陸は宇宙人が造った島だから……私たちの方が……」

最後の方は、泣きそうで消え入りそうな声になって、奈々太は俯いた。

「そうだね」

男の人は奈々太の正面に回り込んでしゃがんだ。

奈々太と視線を合わせるように。

下からのぞき見るように。

「でもね。地球は地球人の星なんだよ。地球人の住む家なんだよ。だから、彼らのやっていることは人の家にずかずか踏み込んで来て勝手に絨毯を敷いて、ここは俺の土地だって、そう言い張るようなことだよ？ 確かにムー大陸は彼らが造った絨毯かもしれないけど、地球は僕たちの星だ、僕たちの家なんだよ。そうだよ？ 奈々太ちゃん？」

諭すような声。

でも怖い目。

奈々太は目を反らして、小さく頷いた。

「協力してくれないかな？ おじさんたちに？ みんなのためにも？ 地球のためにも？」

ゆっくりと時間を掛けて、

「……うん」

イヤだったけど、奈々太は頷いた。

それから奈々太は、

そう、悪いのは花子さんだ。

わたしは悪くない。わたしも被害者だから。

被害者だから町に居てもいい。

亀山町に居てもいい。みんなと一緒に居てもいい。

傷つけられた顔をして。被害者だから。

わたしも被害者だから。

この町にいられる。みんなと居られる。

そう思ってから、奈々太の心で、何かが疼いていた。

それが何かは奈々太にだって判っていた。

それでも、奈々太は被害者だった。

奈々太の傍には4人の大人が立っていたから。

大人にはかなわないから。

怖かったから。

この町にいたいから。

アヤメちゃんといたいから。

珍味くんといたいから。

みんなと一緒にいたいから。

色々なことを秤に掛けて、奈々太は、自分を言い負かした。

悪いのは花子さん。

わたしは何も悪くないから。

だから被害者。

それでも奈々太の胸は疼いていた。

涙がこぼれ落ちた。

07 演説君の駅前演説

4時30分。

相談所の2階の客室で。

猫馬さんは、何かを決意した花子さんと、奈々太ちゃんを見つければとぼとぼ戻ってきた珍味君の三者で話し合いの場を持つことにした。

「わたし、マズルドーマ星に帰ることに決めました」

花子さんは、猫馬さんと珍味くんを前にして、そう言った。

「道夫さんは？」

とだけ猫馬さんは尋ねた。

「……これ以上、迷惑を掛けられない……」

花子さんは顔を伏せた。

茶色い光線が少しこぼれ出て、猫は必死で距離を取った。

しかしペンギン完全装備状態の猫馬さんは平然と受けて立った。

花子さんは、伏せた顔を上げて、

「離婚します」

はつきりと言った。

「何もマズルドーマ星に帰らなくても、ムー大陸には他にも宇宙人と地球人が一緒に暮らせる町はあるんだよ？」

控えめに猫馬さんは言う。

花子さんは寂しそうに首を横に振った。

「もういいんです。一週間掛けて習得した『奈々太殺し』も通じなかつたし」

「あー」

今更、あれはぶっちゃけ冗談だったと言にくい猫馬さんは、斜め上を見てペンギンの頬をぽりぽりと搔いていた。

「だから、旅費を貸してください」

花子さんは猫馬さんに深々と頭を下げた。

猫馬さんは一呼吸おいてから答えた。

「残念だけど。貸せないわ」

「宇宙銀行経由で絶対返しますから」

「だめ」

とりつく島もない態度で、猫馬さんは拒絶した。

「じゃあ、珍味くんが貸してください」

花子さんは珍味くんに頭を下げた。

『そんなお金持つてへん。猫だけにな』

猫だけに仕方ない。

花子さんは納得して、項垂れた。

ふう、とペンギンの中で、猫馬さんはため息を吐き。

「まだ、終わってないでしょう？ 道夫さんとも奈々太ちゃんとも、ちゃんと話し合わないと、ね？」
優しく語りかけた。

「だって、私が居ると。私さえ居なくなれば。これ以上、奈々太ちゃんにも道夫さんにも……猫馬さんにも、迷惑かけられないです」
花子さんは俯き。
ぼろぼろと涙がこぼれる。茶色い光線も。

ペンギンの中の猫馬さんは平気だけど、猫はアウトだ。
いつそ開き直って珍味君は、堂々とうんこを慣れ流した。
異臭が部屋に漂ったけど、生物化学兵器にも対抗出来るペンギンの中の猫馬さんは平気だった。
優しい声で、

「良いじゃない、迷惑かけても。家族なんだから、友達なんだから」
花子さんに語りかけ、ペンギンのひれで肩を叩いた。

「みんなで、背負えばいいじゃない。重い荷物は分け合ってさ。道夫さんや奈々太ちゃんにも背負わせる。わたしも背負ってあげる。その猫にも背負わせる。それでいいじゃない？ みんなで考えようよ、どうするか、頑張ってみようよ、せつかく出会ったんだから」

ぐすつと、花子さんは鼻をすすり、泣きながら、
「猫馬さあん」
目から青い光を出して、ペンギンに抱きついた。
ペンギンのひれが、その頭を優しくなでる。

「所長！ 大変ですよ！ うわっ！ くさー！」

部屋に珊瑚が飛び込んできた。猫糞の匂いに鼻をつまむ。

「なに、ゲーム機が壊れたの？」

せつかく良い感じに決まったと思っていた猫馬さんは、ちよつとむつとして言った。

「違いますよ！　そこまでの非常事態じゃないです！　演説くんが演説してるんですよ！」

「演説くんの駅前演説はいつものことでしょうか？」

「それがですね！　亀ローの中継も入ってるんですよ！」

亀ローとは。

亀山町のローカルなテレビ局のことである。

「それもよくあることでしょうか？」

亀ローはネタが壊滅的なき、たまに演説くんの演説を中継する。ただし宇宙人肯定派の中継も行うため、局としてはけっこう中立だ。

「奈々太ちゃんも一緒なんです！」

それを聞いて、猫馬さんは急いで部屋にあるテレビのスイッチを入れて、最初に移った野球中継のスコアを確認した後に――

舌打ちしてから亀ローにチャンネルを合わせた。

甲高い男の声が聞こえてきた。

映像も映る。

アニメチックな軍服を着たチョビ髭の男が、マイクを持って立っていた。

演説くんだ。

演説くんの横には、小さな女の子。

奈々太ちゃんが俯いて、だらーとパイプ椅子に座っている。

「奈々太ちゃん！」

花子さんが画面にしがみつき、叫んだ。

当然声は届かず、奈々太ちゃんはだらーとしたままだ。

途中から聴く演説くんの演説は、いつになく好戦的だった。
その照準は、花子さんに向いていた。

エイリアン・花子のスリーサイズはナイスバディーを意味するの
か？ 否！ 着ぐるみなのだー

「えー！ー！、なんですかそれー！ー！？」
テレビを揺すりつつ、花子さんが絶叫する。

——しかも中の人はおっさんである！

「うそー！ー！ うそー！ー！ うそですうそ！ 私おんなだよおん
な！ ほらほらほら！」

「いや、判ってるから。判ってるから」
身の潔白を訴えようと脱ごうとする花子さんを、猫馬さんが押し
とどめた。

此処が相談所の中でなければ、大変な人ばかりになっているだろ
う。

演説くんの演説は続く。

——おっさんなのになぜ中西道夫と結婚したのか？ 彼らはホモ
だからである！

「ひどい！ ひどいひどいひどい！ 私だけじゃなく道夫さんまでえ！」

花子さんは怒り狂っている。

相談員たちは眼から出る赤いビームを避けるのに必死だ。

珊瑚は部屋から逃げていった。

珍味くんは背中を少し焼かれて三毛猫が四毛猫になった。

ただし猫馬さんだけは、ナパーム弾の一撃にも耐えうるペンギンの中でふんぞり返っていた。

—— 亀山小学校の生徒や父兄はうんこを漏らした。なぜか？

演説くんの話が、花子さんから事件に移った。

—— 諸君らの甘い考えを目覚めさせるために、漏らした！

「いや、それは違うでしょ」

猫馬さんが、テレビに突っ込んだ。

—— 酒井くんのお父さんも橋本くんのお父さんも、エイリアンの目から出る光線の前に、漏らしていったのだあ！

花子さんは俯いた。

その悲劇の光景を脳裏に描いて。

実際には目撃してないから凄く可愛くデフォルメされていたけど。

—— この悲しみも臭いも忘れてはならない！ 3ー1の父兄たちは『ミ』を持って我々に知らしめてくれたのだあ！

演説くんは握りしめた拳を高々と振り上げた。

——町民よ、立て。悲しみを怒りに代えて、立てよ町民。エイリアンを追い出してこそ、うんちを漏らした人、全てへの慰めとなる！

そこで演説くんは、奈々太ちゃんに合図を送った。

奈々太ちゃんが立ち上がった。マイクを持ち。

ウチュウジン、カエレ

片手を上げて、片言で言った。

すぐだらあーと座る。相変わらず、やる気のない子である。

駅前はずっと静まった後、

——じーく、ウチュウジンカエレ。——じーく、ウチュウジンカエレ

中継は、まばらな合唱でとじられた。

宇宙人が地球にやってきて以来、地球上には宇宙人に友好的な組織以上に、否定的な組織が数多く誕生していた。

地球防衛軍は、その中でも最大規模の集団である。

世界中に下部組織を持っていて、構成員は500万人とも言われている。

亀山町にも支部があり、指揮官は演説くんだ。

彼らは宇宙人排斥を声高に主張している。

それが、事件に介入してきたとなると。

『へたすると、この事件は世界中に飛び火するで』

ややこしいことになったと、珍味くんは猫的に頭を抱えていた。

相談所。重苦しい一同の中。

「なるほど。考えたわね」

ペンギンの中で、猫馬さんは吹っ切れた笑みを浮かべた。

「まず花子さんのナイスなバディーに、整形疑惑ならぬ着ぐるみ疑惑をでっち上げる。さらに追い打ちのホモ疑惑。一人勝ち状態の中西道夫に対する反感を上手く利用しているわ。これは花子ファンの中にも動揺が走ったはずよ。その隙に脈略もなく、うんこ事件に繋げることによって、上手く人民を誘導したわけね！」

「……そんなに大したもんなんやろうか？」

「最後のとどめに、娘である奈々太ちゃんの寝返り。……これで亀山町は二大勢力に分かれた骨肉の仁義なき戦いの渦に巻き込まれていくわ！」

猫馬さんは珍しく……もないけど、ハイテンションだ。

「どうする？ 花子さん？ すでに道夫さんをトコトン巻き込んだわ。彼はこのままじゃホモのレッテルを背負って生きることになるわ。それも着ぐるみ着たおっさんに遊ばれて捨てられたホモのレッテルよ！ ……それでもあなたは道夫さんを置いて逃げ帰るの？」

「わたし……わたし……わたし、戦います！」

花子さんが両手を握りしめて宣言した。

瞳は怒りと興奮で赤く燃えている。

「そーこなきゃね」

猫馬さんはニヒルに笑った。

ペンギン装甲で、花子さんの灼熱光線を受け止めながら。

「後悔させてあげましょう、地球防衛軍の奴ら。この事件を利用して宇宙人排斥運動をいつきに推し進めようとしたんでしょうけど、甘いわね。しゃしゃり出てきたのが運の尽きよ！ 逆に利用してやるわ！」

待っていたのだ、彼女はこういうのを。
動き出すことの出来る切っ掛けを。

「これで花子さんと漏らした人との小さくも重大で手の施しようもなかったご近所の大問題を、宇宙人と地球人のイザコザにすり替えることが出来る！ いつものように防衛軍を混戦に引きずり込んで、論点を暈かして比喻を混ぜつつぐだぐだにして詭弁で乗り切るわよ！ 亀山相談所の名にかけて、この事件、なあなあにするわよ！」

『おう！』

と、花子さんの光線を避けるために猫馬さんの後ろに隠れていた珍味君は、前足を突き上げた。

そのあと、

『なんでやねん』

と一応、突っ込んだ珍味くん。そのまま、尋ねた。

『それで具体的にどうするねん？』

「それは、……わたしに聞かれても」
ペンギンがやれやれという感じに、首とひれを振った。

「じゃあ、誰に聞けとおっしゃるんですか？」

「みんなで考えましようよ、ぐだぐだにする方法」

「ぐだぐだに、なあ」

珍味くんは猫的に大丈夫かなと心配になった。

この人に任せていても、よけいトラブルが大きくなるのではないかと。

素直にごめんなさいと謝った方が得策ではないか？

猫的にそう思ったが、うんこを漏らすことに対する抵抗は、人間種にはかなり大きいようなので、言わずに飲み込んだ。

代わりに、

「奈々太はどないするんや？ ほつといていいんか？」

「大丈夫よ」

猫馬さんは自信たっぷり言い切った。

「地球防衛軍は、基本的には平和的なアジテーションが殆どで、過激な活動はあまり好まないから。時たま下部組織が暴走することもあるけど……子供に危害を加えた事例は……滅多にないわ。だからこそ、支持者が多いわけだけど……そういう意味では奈々太ちゃんの心配はなさそう、と思うわ、たぶんだけど」

「……ほんまに大丈夫なんやろな？」

「大丈夫だって言ってるでしょ？ ……きつと」

珍味くんは猫的に本当に大丈夫かと心配になった。

よけいに奈々太がぐれる結果になるのではないかと。

奈々太がぐれーと奈々太になってしまうのではないかと。
これは慎重に対応しなければならぬ。慎重に。

「わたしに良い考えがあります！」

花子さんが手を挙げて発言した。

「殴り込みましょう！」

「そうね、それが良いかもね」

『まてい！ メスブタども！』

珍味くんは過激に突っ込んだ。

そのせいでまた毛を少し焼かれてペンギン足で蹴られた。

『……もう少しまじめに考えてください。お願いします』

珍味君は土下座した。

「考えてるわよ、それなりに」

猫馬さんは苦笑して微笑んだ。

「あのね、珍味くん」

そして珍味君の正面にしゃがみ込み、優しい目で珍味くんの瞳を見つめる。

ゆっくり教え諭すように、

「こーいう事件って深刻にしていれば幾らでも深刻に出来るけど、それで良いことなんて一つもないの。極力、軽く接して、くだらない事件にしてあげた方が、みんな、漏らしちゃった当事者も含めて、救われるのよ。そのためには、漏らした人たちが騒ぎ出してからでは遅いの。被害者相手に開き直るわけにもいかないし、下手な謝り

方すると相手は感情を高ぶらせて攻撃的になるし。そうしたらみんなの心に深く刻まれて傷になって簡単には癒せなくなるわ。だからこんな事件はスピード勝負でくだぐだにして、他の事件にすり替えてしまつて、何があつたかも分からなくなるくらいあやふやにしてしまつのが一番。それが、誰にとつても幸せな落としどころよ。分かる？」

『……………？』

猫なりに懊悩してる珍味君の頭をくしゃくしゃして、

「まあ、それが私なりのやり方なわけだけど。珍味君は珍味君のやり方をゆっくり探したらいいわ」

言つて、猫馬さんは起ち上がった。

ゆつたりと手を上に伸ばして背伸びし……ようとしたけど、ペングインの中では無理だった。

それから、微笑んで一同を順番に見回して。

「さあ、反撃しましょうか」

猫馬さんはふふふと笑つて電話をかけ始めた。

08 アヤメちゃん、舞う

地球防衛軍亀山町秘密基地。

ご用の方はお気軽にお入りください。

と、大きな看板の掛かった一軒家。

その横に、上杉、と控えめに表札が掛かっている。

演説くんを初めとした、亀山町の幹部たちが集まっていた。

演説の成功を祝い、祝杯を挙げていた最中だったのだが、彼らは今、ちよつと戸惑っていた。

夜の8時前である。

子供はそろそろ寝なければならぬ時間のはずだ。

なのに奈々太ちゃんの友達が、それもとびっきりの美少女が、突然訪れてきたのである。

「わたし、漏らしちゃったの」

彼らを前に、来訪者、霧咲アヤメちゃんは、ぽつりと告げた。

「もう、わたしお嫁には行けないわ。これじゃお婿さん貰うしかない！」

そう言って泣き出す彼女に。

「ごめんなさい」

奈々太はただ涙ぐみ、謝ることしかできなかった。

「奈々太ちゃんが謝る必要はないよ」

困惑しながらも駒田少佐が、奈々太の頭を撫でながら言った。

「悪いのはみんな、あのエイリアンなんだから」

「そうよ。奈々太ちゃんは何も悪くない。悪くないよ！」

少佐の言葉にアヤメちゃんも勢いよく立ち上がり、両手を広げて叫んだ。

「悪いのはあの女よ！ 花子さんよ！ いいえ、さんは要らないわ、呼び捨てよ、呼び捨て！ 花子で十分。いつそ子も要らない！ 花よ花！ あんな女は花よ！」

アヤメちゃんはクルクルと回りながら、「花なのよ、花！」と叫んでいた。

アヤメちゃんの何時にないハイテンションに、奈々太はちよつと嘘くさいと思ったけど、それくらいショックだったのかと思い直し、改めて落ち込んだ。

「悪いのは、花なのよ！」

アヤメちゃんはなおも言っている。

防衛軍の大人たちに宥められて、アヤメちゃんはやっと落ち着きを取り戻した。

「それで……これから……どうするん、ですか？」

回りすぎたアヤメちゃんはちよつと青い顔で頭を押さえ、フラフラしながら、演説くんに尋ねた。

「いや、何もしないよ。僕たちは当事者じゃないからね……当事者もいるけど」

ちらりと橋本中佐を見て。

「ただ、みんなに事件のことを、エイリアンの怖さを訴えかけるだけさ。後はみんながどう考えるか、どう行動するか、だよ」

「甘い！ 甘いわそんなの！ そんなのじゃ漏らした人の無念は解消されないわ！ 天に昇れないの！ いつまでもいつまでも無念の想いが学校中を彷徨って人に取り憑いて新たな被害者を生んでまた彷徨って取り憑いて被害者を生んでって……なんかそんな、そんな感じになるはずよ！」

またアヤメちゃんはクルクルと回り始めた。慌てて防衛軍の大人たちが止める。

「はあ、はあ、はあ。……わたしは当事者だもん。奈々太ちゃんも……そうだよね！」

「う、うん」

奈々太は迫力に押されてつい頷いた。

「じゃあ、仕返ししましょう！ 花子さんに！ いいえ花よ！ 花に！」

部屋の中でまたアヤメちゃんは回り始める。

慌てて二人の大人が止めに入る。

部屋の隅では演説くんを始め軍の幹部が頭を寄せ合ってひそひそと話し合っていた。

「おい、どうするよ、あの子？」

「どうするもこうするも……」

「とにかく親か警察を呼んで引き取って貰おう」

演説くんが結論になりそうな大人の意見を述べた。

実際、彼らは特に派手な行動を起こすつもりはなかった。

奈々太ちゃんを引き込んだのも、彼女のためであり、防衛軍のためではなかった。

多少、相談所に対する嫌がらせの意味もあるけど。

あのまま彼女が相談所や自宅で生活していれば、彼女は宇宙人側として、つまり加害者側として町の人たちから認識されるおそれがあった。

そこで数日、防衛軍で保護、活動にも参加して貰う。

それによつて彼女は加害者ではなく、被害者として町の人たちに認識されるようになる。

宇宙人の騒ぎに巻き込まれた一般人が、日常生活に戻るように尽力するのは、宇宙人排斥運動と並んで重要な、地球防衛軍の主要活動である。

しかし。

「あの子、確か霧咲秀雄の娘さんですよ」

銀縁眼鏡の駒田少佐が、言った。

「霧咲つてあの、評議会議員のか？」

演説君の質問に対し、禿げた頭の橋本中佐が、

「ええ、そうですよ、たしか。うちの克夫や、奈々太ちゃんとも同じクラスだから。私が送っていきましようか？」

「いや、待て」

演説君が制止する。

「そうか……あの、霧咲秀雄の」

霧咲秀雄。

亀山町で、ただ一人のムー大陸評議会議員だ。

演説くんは考え始めた。

深入りすべきではない。

直接的には事件に関係のない防衛軍が出しゃばると、事件がぐだぐだになる危険があるのだ。

特に相談所の坂本猫馬が絡んでくると、そういう傾向になる。

いつもいつもいつも、そういう傾向になる。

なんかよく判らない間に、犯罪者にされてしまったりもする。

が、これは、チャンスかもしれない。

長年の夢だったあの構想を、亀山少年少女地球防衛軍を、ついに実現する時が来たのではないだろうか？

ちらりと演説くんはアヤメちゃんを見た。

頭は怪しい彼女だが、可愛いらしい容姿をしているではないか。

にへへへへと、軍服姿のアヤメちゃんを思い浮かべて、演説くん

は微妙に微妙な笑みを浮かべた。

さらに彼女は、霧咲秀雄の娘で事件の被害者でもある。

悲劇の美少女権力者の娘ヒロイン！

これは、征ける！

逝けるぞ！

演説くんの頭の中で、何かがスパークした。

たとえば坂本猫馬が介入してきたとしても返り討ちに出来る！

エイリアンの犬め！

積年の恨みを晴らしてくれる！

お手とかさせてやる！

演説くんの中で、野心とか何かが萌えて燃え上がっていた。

「とにかく、彼女の話聞いてみようじゃないか？ エイリアンに苦しめられる地球人の救済、それこそが我々の存在理由であるはずだ！」

「それはまあ、そうだけど、ねえ」

女性士官が、困ったように、ちらりとアヤメちゃんを見る。

そのアヤメちゃんは、

「仕返しするのよ！ 花に！ 花に！ 花に！ 花に！ げふ、げふ」

壊れた妖精さんのように叫び続けて、最後の方で咳き込んでいた。

橋本中佐がアヤメちゃんの背中を撫でる。

落ち着いたアヤメちゃんは、地球防衛軍の視線が集中して聴く体制に入っているのを確認してから、こほんっと咳払いして、

「呼び出しましょう！ 花を！ もう早速！」

左手を腰に当て、右手で天井を指し示し、主張した。

「呼び出して、どうするんだい？」

にこやかに演説くんが訊ねると。

アヤメちゃんはくると奈々太ちゃんに向き直った。

「いいでしょ！ 奈々太ちゃん！ やってくれるでしょ！」

「え？ …… うん」

何をするのか判らないし、奈々太はイヤだったけど断れなかった。アヤメちゃんをこんなに壊してしまったから。

それに話がなんかそんな方向に否応なく向かっていたから。

「良かった！ わたし、奈々太ちゃんならそう言ってくれると思う」

て、もう招待状出てきたの！」

「……招待状？」

駒田少佐が、警戒感を醸し出しつつ訊ねた。

「そう。中西奈々太は預かった。返して欲しかったら地球防衛軍龜山町秘密基地まで花子さん一人で今夜中に来い。来なければ中西奈々太の命はないと思え！」

「ちよつ、ちよつと待つてよ！」

防衛軍の女性士官は悲鳴を上げた。

アヤメちゃんは聞く耳持たず、またクルクル回り出した。

仕方なしに、端の方で演説くんたちは相談する。

「ちよつと、どうするのよ？」

「洒落になってないぞ、これじゃまるで誘拐じゃないか」

「まるでじゃなく誘拐よ。狂言だけど、狂言誘拐でも立派な罪になるのよ？」

「し、仕方ないさ。子供のしたことだ。彼女はかなり傷ついているようだし、美少女だし、仕方ないじゃないか。そ、それに彼女たちは歴とした被害者なんだし……政治家の娘だし。だ、大丈夫だ。と、とにかく、続きを聞いてみようじゃないか」

演説くんは隊員たちを一生懸命宥めた。

で、話の続きは。

「花が来たらこう言うの！ お前の目から出る光線のせいで、多くの地球人がちよつと悲しめな事になったぞ。罪には罰が必要だ。判

るな？ もしもお前が少しでも責任を感じているのなら、出来るはずだ。娘を無事に返して欲しかったら、お前は自分の心臓を刺して死ねええー！ー！」

「出来ねーよ！」

さすがに演説くんも叫んだ。

アヤメちゃんは傷つき、くるくると回り出した。

端の方で相談する一同。

「ちよつと、どうするのよ？」

「まさかお前、死ねとか言うのかよ？ 本気で言うのかよ？ あの子絶対どこか、具体的に言っちゃうと頭とかおかしいぞ？」

「言うわけ無いだろう？ いくら何でも。そんなことしたら僕たちはアレなテロリストになってしまう」

「大丈夫だよ。どうせ花にそんなこと出来るわけないじゃない？」

いつの間にか話の輪に加わっていたアヤメちゃんが囁く。

「実の母親でもそんなこと出来ないよ？ 彼女にとって奈々太ちゃんって何？ 大丈夫、きっと花は刺したりしない。心臓とか刺したりしない。言い訳に終始するから。逆ギレとかしちゃうから」

「確かに、そうだろうけど……」

「それをね、ビデオに撮るの。宇宙人の間抜けなところを撮るの。それで編集したりねつ造したりして流すのよ。それに、ほら、これ」

アヤメちゃんはポケットからナイフを取り出し、刃の部分を指で押して見せた。

刃の部分はアヤメちゃんの指を傷つけることなく、へこつ、へこ

つ、と。

「へっこむナイフよ。これなら絶対に安全だから。洒落ですむから」
演説くんはアヤメちゃんからナイフを受け取って、確認する。

へこつ、へこつ。

「それにね、被害にあった人たちは嘘でも良いからそれくらい言ってくれないと納得しないと思う。あんな目にあって誰も何もしてくれないんじゃ哀しいよ。地球防衛軍って何のためにあるの？ みんな頼りにならないなって思っちゃうよ？ 言うだけ言って手を汚さない人って、わたし大嫌い。何も言わない人よりも卑怯だと思う。わたしは、戦うお兄さんが大好き！」

むう。演説くんは呻いた。

へこつ、へこつ、と玩具のナイフを突つつきながら。

確かに彼女の言うとおりだ。

演説君がどれだけ声高に宇宙人排斥を叫んでみても、真剣に聴いてくれる人はあまりいなかった。

アニメチックに変えてみて、やっと紙袋抱えたアレな感じのお兄さんたちが集まってくるようになったけれども。

出来ればもつと普通の人たちも集めたい。

女の子とかを集めたい。

可愛い女の子とかを集めたい！

僕の演説を聴いて欲しいんだマイハニー。

何故集まってくれないの？

どうして僕の心のビート聴いてくれないの？

それは自分たちが平和主義に拘るあまり、手を汚さないことにあ

ったのかもしれない。

演説くんの中で何かが都合良く怪しい方向にねじ曲がっていた。

演説くんは今、ダメなお兄さんが美少女に囁かれると感染してしまふ病気に罹っていた。

「判ったよ。お兄さんに任せておくれ」

演説くんは請け負った。

劇団 どんづまり の人気子役・霧咲アヤメちゃんが、猫馬さんによって送り込まれた刺客であることに、演説くんはまだ気づいてはいなかった。

09 発覚

そして、花子さんがやって来た。

「おっと、おかしなまねはするなよ。お嬢ちゃんの命が惜しかったらな」

「このわたしにへっこむナイフで心臓を刺して死ねっていうのねえ
――！」

「まだ言ってなあ――い！」

演説くんは世界の中心に向かって叫んだ。

そして、すぐに気づいた。

へっこむナイフだと！

何故やつはそんな僕らのシャイな秘密を知っている！

「くっ、そうか、そういうことなのか」

これは罠だったのだ。

その証拠に、秘密基地の外には武装した警察がひしめいている。

「犯人に告ぐ！ 今すぐ人質を解放しなさい！」

「いやああ――！ 助けてえ――！」

アヤメちゃんが叫ぶ。

どこから持ち込んだのか、ビデオカメラを抱えて、クルクル回っている。

「ちよつと、どうするのよ!? 私たちなんかあつという間に崖っぷちよ!」

女性士官も真つ青だ。

「くつ、おのれ坂本猫馬! なんて卑怯な!」

演説くんはアヤメちゃんには怒りを向けなかった。

だってそれはあまりに自分が惨めで哀しいから。

だからとりあえず演説くんは猫馬さんを憎んだ。

「いいわ。そこまで言うなら、わたしやる。奈々太ちゃんを助けるためだもの。奈々太ちゃん見てて。わたしちゃんと母親として、へっこむナイフで心臓を刺して見せるから! やってみせるから!」

花子さんが部屋の入り口付近で言っていたが、防衛軍は誰も見てないし聴いていなかった。

だけど。

奈々太ちゃんはちゃんと見ていた。

花子さんを。

哀れむような目だったけど。

そんな花子さんは落ちているへっこむナイフを拾うと、へっこつ、へっこつ、と、へっこむことを確認してから。

「えい!」

自分の胸に突き刺した。

へこつ、とナイフがへつこんだ。

花子さんは床に寝そべる。

「うつ、わたし死ぬ、死ぬ。死んで罪を償っちゃうのね、許されちゃうのね。思えば短い青春だったな。奈々太ちゃん、最後にお願ひがあるの。わたしのこと、お母さんって呼んでほしい……ママでも良いよ?」

奈々太ちゃんは花子さんのすぐそばによつて。

げしつ、と蹴つ飛ばした。

「痛!」

げしつ、げしつ、と連続でけつ飛ばした。

「痛い痛い、奈々太ちゃんちょっと痛い! 痛いよ!」

奈々太は、花子さんが来たとき、本当はちよつと嬉しかったのだ。来てくれないと思つていたのに来てくれた。

花子さんが来て、青い目で笑いかけられた時に、凄くほつとした。もしかしたら、またやり直せるんじゃないかって、少し思った。

あの家で、この町で。

みんなでもう一度暮らせるんじゃないかって。

奈々太さえ、反省すれば。奈々太さえ、頑張れば。

奈々太さえ、強くなれば。

そして、後悔した。

自分は酷いことをしている。

全部を花子さんのせいにして。
嘘までついて。

こんな酷いことをしている。
だから、花子さんに謝ろう。
みんなにもちゃんと謝ろう。

奈々太は、凄く頑張って決意した。
花子さんが来た時に。

なのに。

「なんで、ナイフが、へっこむナイフだって、知ってるの？」

「え？……………はっ！」

蹴られて亀になっていた花子さんは、気が付き焦った。
猫馬さんから「へっこむナイフだから、絶対大丈夫だから。へっこむナイフだから」と何度も念を押されたために、ついへっこむナイフと言ってしまったのよ、ボンヘッドね、わたしったら、いけない。そんな感じだった。

「何でって……直感、かな？」

げしっ、げしっ、げしっ。

「痛い痛い！ 奈々太ちゃん痛いよ！」

奈々太は、カメラを構えて花子さんを撮影しているアヤメちゃん
に向き直った。

「アヤメちゃんもグルだったんでしょ？」

「はて、何のことでござんましようか？ わたくしにはトンと判りかねますが？」

アヤメちゃんは変な脂汗を流しながら、正座してカメラを構えたままあさつてな方向を撮影して言った。

怪しい、と思った。

でも、奈々太はそれ以上追求できなかった。

奈々太ちゃんは、まだアヤメちゃんが漏らしたと信じていて、かなり負い目に感じていたから。

その時点からすでに虚飾に彩られていたとは、思ってもいなかったから。

だから奈々太は仕方ないから、げしっ、げしっ、と花子さんを蹴ってみた。

10 カッパツパ

地球防衛軍の秘密基地から少し離れた路地。

相談所の誇る移動要塞・亀山3号（改造したキャンピングカー）が駐まっていた。

「ふっ、見破られたようね」

『……見破られたというか……暴露したというか』

アヤメちゃんが送ってくる映像を見ながら、猫馬さんと珍味くんがどんよりとしていた。

珊瑚は端のモニターを一台占拠して、ボンバー中だ。

猫馬さんの考えた筋書きはこうだった。

凶悪な地球防衛軍が奈々太ちゃんを人質に取っちゃった。

これって凄く一大事！

「ふはははっ、奈々太ちゃんは預かったぞ。あんなことやこんなことをされたくないければ、花子さん一人で秘密基地に来い！」

「駄目！ 花子さん！ これは罠よ！」

「それでもいくわ。何故ならわたしってば奈々太ちゃんのパパだからよ」

「ああ、花子さん、偉いわ格好いい」

「来たか、花子さん。責任を感じているのなら、お前は心臓を刺して死ねええー！ でないと奈々太ちゃんの命はないよ？」

「致し方なし！ 罪を償うため、奈々太ちゃんを救うため、中西花子！ いきつまあーす！」

ずしゅ！

「ああ、花子さん、いいえママ！ 死なないでえー」
その様子をアヤメちゃんが撮影する。
で。

警察が突入。

奈々太ちゃんと花子さんを救い出して、悪逆非道な防衛軍を捕縛する。

亀ローも中継する。

助かりたい地球防衛軍は、浅ましくも醜い言い訳に終始するだろう、それはそれで予定の内だった。
彼らが彼らの知っている範囲で真実を述べたところで、花子さんの不利になる要素はない。

狂言誘拐だったこと。花子さんの罪の意識を試すためにやったこと。絶対出来ないだろうと思いつながらやったこと。

ナイフは玩具で危険はなかったこと。花子さんはそれを知らなかったこと。

言えるとしても、その程度だ。

結果的にへっこむナイフで一命を取り留める花子さんだけど、罪の意識と奈々太ちゃんを救うために、自ら死のうとしたと。

皮肉にも地球防衛軍のお墨付きが得られるのだ。

花子さんが胸にナイフを突き立てるシーンは、きっと亀ローで何度も流されることになるだろう。

で、心労のあまり、と言うことにして、花子さんと、ついでに奈々太ちゃんは一週間ほど入院して貰う。

その間に、道夫さんと校長と担任の先生が、漏らした人の家に誤りに廻る。

校長と担任も一緒に廻らせるのは、何となく学校にも非があるように見せるためだ。

もちろん、猫馬さんもファンクラブの人たちと一緒に裏で暗躍す

る。

事件は必ずうやむやに出来る！

さらには、命がけで奈々太ちゃんを守ろうとする花子さんを、奈々太ちゃんも見直すに決まっている。

絶対間違いない。

一石二鳥どころか一石で鳥の王国を壊滅できる。

この作戦、猫馬さんとしては、ここ最近の活動の中で、かなり自信があつた。

集大成とも言える出来だと自画自賛。

後付で色々と理由をでっち上げてみれば、かなり良くできているように思う。

はずだったのに。
これでは。

「高度な演技力が要求されることを、計算に入れて無かつたわ」

『いや、たぶん簡単な演技でも失敗したと思うで？ 彼女ならな』

「ですよー」

ボンバー少女も同意し、猫馬さんも、

「さすがね、花子さん、侮れないわ。ある意味、演技でもああは出来ない……せつかくアヤメちゃんが頑張ったのにねえ」

『で、どないするんや？』

「どないするつたつてねえー。わたしに聞かれても……」

猫馬さんは、自暴自棄になった外人のジェスチャーで手をひらひらとさせた。

「もうこうなつたら、とりあえず警察を突入させましょう」

『大丈夫なんか？』

「地球防衛軍を騙すのには失敗したけど、まだ何とかなるわよ。こう見えてもわたし、警察には顔が利くから。こうなつたら奈々太ちやんを確保して、諭して口裏を合わせて本当に誘拐だったことにしちゃいましょう。うふふふつ、知られちゃった以上、防衛軍の人たちには本気で泣いて貰いましょうね。何とか防衛軍を悪者にして、ぐだぐだにして時間を掛けて誤魔化してやる」

『酷い話やな、ほんまに』

「人生つて厳しいよね」

猫馬さんは、哀しそうに微笑むのであった。

猫馬さんの指示を受け、猫馬さんのマブダチで、人間だけである意味では犬の戌井警部が、部隊を率いて突入を開始した。

戌井警部は、窓ガラスを割って格好良く入るのが好きだけど、もしも破片が飛んで中の女の子に怪我でもさせたら猫馬さんが怖いから、大人しく玄関から侵入した。

「ちょっと、どうするのよ？ 警察が入って来ちゃったよ！」

玄関から聞こえてくるだみ声と足音に、女性士官は青くなっている。

「だ、大丈夫だ。奈々太ちゃんは同士だから。友達だから。本当の誘拐じゃなくて冗談だから」

駒田少佐が宥める。

二人は救いを求めるように、奈々太ちゃんを見た。

その時、奈々太ちゃんはまだ花子さんに家庭内暴力を繰り広げていたが、そんな奈々太の細い首に、ぬっと太い腕が回され、奈々太は花子さんから引きはがされた。

奈々太は苦しくて、うくつと呻いて、両手でその腕を掴んだ。すつと首筋に刃物が突き出され。

奈々太は小さく息を飲んで、掴む手を離れた。

「橋本中佐！ 何を！」

女性士官がますます青ざめた。

「橋本中佐！ ど、どういっつもりですか！」

駒田少佐も叫ぶ。

「奈々太ちゃん！」

今まで蹴られて丸くなっていた花子さんが、跳ね起きる。

アヤメちゃんは言葉もなく、青い顔でカメラを向けていた。撮っている、と言うよりは、レンズ越しに、呆然と見つめている感じ。

「すまないねえ、奈々太ちゃん」

カップのような頭をした橋本くんのお父さんが、奈々太ちゃんに出刃包丁を突きつけている。

ドアが開いて、室内に戌井警部が登場した。

「さあ！　そこまでだ！　誘拐犯の地球防衛軍め！」

猫馬さんから狂言誘拐だと聞かされていた戌井警部は、危険はな
いものと決めつけ、躊躇なく橋本中佐に詰め寄ろうとする。

待って！　様子がおかしいわ！

その戌井警部を、耳に差し込んであるイヤホンからの声が制止す
る。

猫馬さんだ。

猫馬さんがアヤメちゃんの送ってくる映像を見て、異変を察知し
たのだ。

命令を受けて、戌井警部は即座に停止する。

電池の切れた愛玩ロボット並みに、ぴくりとも動かなくなる。

「動かないくださいによ？　警部さん」

ヤバイ語尾で橋本くんのお父さんは念を押し、奈々太の首を絞め、
引きずるようにして、窓際にじりじりと移動を開始した。

『おいおい！　どないするんや！』

亀山3号の中では、珍味くんが声を荒げていた。

「落ち着いて。少し様子を見ましょう」

『様子を見ようって！　もし奈々太に何かあったらどないするんや
！　どう考えても非常事態やろうが！？　あのおっさんのハゲ方は

かなり危険やで!？」

「良いから落ち着きなさい。予定外だけど……これはチャンスかもしれないわよ?」

猫馬さんはニヒルに笑った。

「何たってヤツは警察の前で凶行を犯した。カッパだからって許される行為ではないわ。狂言誘拐が本当の誘拐になったのよ? ねつ造とかする必要が無くなったのよ? 願ったりかなったりじゃなくて? ……だから、もう少し様子を見ましよう。あのカッパが足掻けば足掻くほど、こつちにとっては好都合なんだから」

「そんなこと言って、もしいきなりブスツと来たらどないする気なんや!？」

「大丈夫よ、珍味くんは心配性ね。こういう状況でそれはあり得ないわよ。やるならもっと早く羽交い締めにした時にやっているはず。それに」

「それに?」

「人間って意外と丈夫に出来ているから」

「うおおおおおああー!ー! 奈々太あ、今助けに行くぞおー!」

もうこのメスブタには任せられない。

走れ珍味! 走るんだ!

珍味くんは友達を助けるために走るのであった。

「行っちゃいましたね」

珊瑚が他人事みたいに言う。

「ま、ほっときましょう。猫の一匹、大勢には影響ないでしょう。それより、京子とサーちゃんは？」

今すぐでも突入できるわ

撃って良い？

無線を通じて返答が帰ってくる。

「もうちょっと待って。出来れば私たちは前面に出ない方が都合が良いから。出来る限り我慢して。でも、奈々太ちゃんが危ないと判断したら、即撃って良いわ」

了解

「京子も危ないと思ったら躊躇無く行動して」
了解

おでわ？

「ジオンビーは指示があるまで絶対に動かないで、絶対によ？ 絶対」

あうー

「返事は？」

わかた

亀山相談所の誇る戦闘集団に、万が一の場合の行動許可を与えてから、猫馬さんはモニターを見る。

アヤメちゃんの送ってくる室内映像や、上空500メートルに位置取った飛空挺エルドラドが撮影している超高解像度映像。

それと並んで表示している亀ローのテレビ映像に、窓越しに人影

が確認出来た。

猫馬さんは手元のパネルを操作して、エルドラドから発信してる妨害電波を、

少し強くし、人物の特定は出来ないようにする。

カッパが何を考えてこの行動に出たのか、それは猫馬さんも読み切れていなかった。

酔っぱらって錯乱しているだけなのか……その割りには目の奥に正気の色がある。

ただ一つだけ、猫馬さんは理解していた。

転がるサイを止めた瞬間、花子さんの負けは確定することを。

例え防衛軍にうまく罪を擦り付けて、ぐだぐだに出来たとしても、事件を誤魔化すことが出来ても。

奈々太ちゃんに認められなければ、花子さんの勝ちには為らない。だから、この状況は、チャンスだった。

例えどれほど可能性が低くとも、ゼロよりは無限に大きなチャンスだった。

カッパの作ったこの瞬間は、花子さん、奈々太ちゃん。

二人に与えられた仲直りのための最後の機会なのだ。

花子さんが自ら血路を切り開くことを願いながら。

奈々太ちゃんが勇気を振り絞ることを願いながら。

僅かでも、二人の心が触れ合うことを願いながら。

猫馬さんは穏やかにモニターを見つめていた。

11 カッパッパ

橋本中佐は窓際まで到着すると、大きく窓を開けて、外を覗き見た。

いや、外から見えるように開いたのだ。

「沢山来てますにゃー！。夜分遅くにご苦労にゃことです。にゃにゃ、亀ローも来ていにゃすか、ちようど良いですにゃ」

「気でも狂ったか、中佐！ 冗談はよすんだ。奈々太ちゃんを解放しろ！」

演説くんは指揮官として、橋本中佐を説得しようとした。

「すまないにゃー、大佐。それでも色々と考えたんですにゃ」

奈々太ちゃんを抱えたまま、橋本中佐は、へらへらと話し出した。

「あの子の言うとおりだと思っんですにゃ。誰かがやらないと行けないんでにゃ。あんな演説じゃ、慰めにはならんのにゃ。こんなゴタゴタでは、終われんのにゃ。このままじゃあんまりにも哀れじゃないですにゃ？ うちが、家族みんなで漏らしたんですよ？ 仕返ししなければ。誰かが仕返ししなければ。さあ、花子にゃん」

中佐は花子さんの足下に、果物ナイフを放り投げた。

すつと、橋本中佐の瞳に、真剣みが宿る。

「それで、あなたは心臓を刺せますか？ 自分の心臓を？ 本物の刃物ですよ？」

「うつ」

花子さんは呻き、一步後ずさった。

「……拾わないんですか？」

橋本中佐は奈々太の首に、包丁を押しつけた。

花子さんは怖々とナイフを見て、奈々太ちゃんを見て、包丁を見て、もう一度ナイフに目を向け、震える手を差し出した。
拾い、唾を飲み込み。

ゆっくりと自分の胸にナイフを当て。そこで、固まる。

「出来ないんですか？」

じつと動かない花子さんに、橋本くんのお父さんは、無表情で。

「出来ないでしょう？ 良いんですよ、無理しなくても。それでは——そこで、うんこでもして貰いましょうか？」

「うつ」

花子さんが呻く。

「中佐！ それは！」

危うく、良い！

と叫びそうになった演説くんは、慌てて口を押さえて、もごもご言った。

「それも出来ないんですか？ 良いですよ、当然です」

演説くんの期待とは裏腹に、そんな属性のない橋本中佐はかなり早く切り上げた。

「では、あなたはいつたいどうやって償うつもりなんですか？ 沢

山の人に恥をかかせて？ 人の家庭を引つかき回して？ どうせ、逃げ帰るおつもりだったのでしょうか？ 私たちに殺され、死んだふりをして。身勝手ですね。今回は、多くの人が恥をかいだ。次はいったい何が起るんでしょうかね？ 人が死ぬことになるかもしれない。町が滅びるかもしれない。宇宙人を野放しにしていれば、近いうちに、きっとこれ以上の悲劇が起るんでしょう。何せ、簡単にこんな大陸を造ってしまう人たちなんですから。わたしたちは、それを心配しているんですよ。お互いのためにも、地球には宇宙人は来ない方がよい。責任の取れない宇宙人は、来ない方がよい。わたしたちは、まだ、一緒には住まない方がよいんです」

そう言つて橋本くんのお父さんは、奈々太の首を絞める腕を解いた。

「奈々太ちゃん、怖い思いをさせてすまなかつたね」

橋本くんのお父さんは、寂しそうに謝った。包丁を足下に落とす。

「でもね、誰かが言わないといけないと思つたんですよ」

橋本くんのお父さんは、ゆっくりと警察に拘束された。

「……やられたわ」

猫馬さんは、悔しそうにため息を吐いた。

地球防衛軍・亀山町支部に在籍する人間のデータを、猫馬さんは把握してあった。

演説君こと上杉善治、武闘派筆頭・駒田明春、穏健派筆頭・古田泰三牧師、この三人が、名実共に亀山支部の重鎮にあたる。

次に目立つ人物と言えば、最近加入し、あつという間に士官に昇進した桜井薫という――猫馬さんの高校時代のアホなクラスメート。地球愛、をキャッチコピーに、彼女は精力的に広報活動を行っていた。

彼女の参加後、亀山支部の構成員が約20人、増えていた。

亀山支部は、地球防衛軍の中でも特にアジテーション好きが集まっている。

しかし、猫馬さんの知る限り、橋本カップは、最初期からのメンバーながら、穏健派に属する人物で、今まで特に目立つ行動を取ったことは無かった。

のだが――、

「あのカップ。意外に食わせ物じゃない」

画面の向こうで、カップが連行されていく。

何かを悟ったように、穏やかな表情で。

逆に花子さんは立ちつくし、完全にうちひしがれている。

奈々太ちゃんも、跪いて、泣いている。

奈々太ちゃんに口裏合わせを頼むことは、もう出来ないだろう……
…彼女のためにも。

「まあ、仕方ないわね」

猫馬さんは立ち上がった。

「残念でしたね」

寂しそうに、珊瑚が言う。

「そうね」

猫馬さんも、寂しそうな声だった。

「でも、やれることはやったんだから。仕方ないわ。努力はしたものの……負けただけね。——でもね？ 何もしないで花子さんが帰っちゃうより、こっちの方が、花子さんにも奈々太ちゃんにも、絶対に良かったと思う。行動した方が、戦った方が。離ればなれになっちゃうけど……きっと成長できるわ、二人とも。いつか、これも大事な思い出になる、糧になる。そして、いつかきつとまた会えるわ、宇宙のどこかで」

猫馬さんは両手の指を組んで、うーんと伸びをした。

「わたしも、反省しないとね。何だか、大事なものを忘れていた気がする」

「そうですね。所長は色々なものを放棄しすぎてますからね。猛省しなきゃ」

「……………あなたこそね」

猫馬さんは、ボンバーマンする珊瑚の横で、モニターの向こうにいる、最近親しくなった友達を、別れの迫った親友を、寂しそうに見つめていた。

橋本中佐は、地球防衛軍の女性士官こと、桜井薫・階級大尉に、真摯な眼差しで小さく会釈してから、警察に連行され、部屋を後にした。

そんな彼の背中を見送り、桜井大尉は、ハンカチを取り出して、自らの目尻をぬぐった。

橋本中佐を更生させたのは、間違いなく彼女だった。別に不倫とか、出来てるとか、そんな関係ではない。はつきり言ってハゲは彼女の好みの大気圏外にある。

あれはそう、地球防衛軍が駅前演説を終わらせ、秘密基地に帰還した時のことだった。

橋本中佐は、まだ酒瓶を抱きかかえて、飲んだくれていた。傷心で、尚かつ酒に酔っていた橋本中佐は、駅前演説には参加せず、奈々太ちゃんを迎え入れた後は、ずっと秘密基地に籠もっていたのだ。

そんな彼の頬を、桜井大尉は、おもいきり引っぱたいた。

「いい加減にしなさい！ 中佐！ いつまで飲んだくれてる気ですか！？」

橋本中佐は、張られた頬を押さえ、きょとんとした後、自虐的に笑んだ。だが、何も言わなかった。

桜井薫は、そんな彼に言い聞かせるように、言葉を紡いだ。

「良いですか？ 中佐。過去は消すことが出来ないんです。お酒飲んでも何しても、消すことは出来ないんです。だけどね、変えることは出来るの。あなた次第で、過去の意味は変えることが出来るの

よ！」

「うーん」

難しい顔で、演説君がうなった。

「それはどうかな？ 漏らしたのは今日の数時間前のことだから、過去にするのは早すぎないか？ 現在進行形だろう、この事件は？」

もちろん、桜井大尉は、そんな突っ込みを無視した。

「大事なのは、過去を振り返る事じゃない！ 引きずる事じゃない。今をどう生きるか！ これからをどう生きるか！ そうでしょう！？」 中佐！ 過去の出来事で、未来を汚してはならない。諦めないことが、私たち地球防衛軍のポリシーだったはず！」

がっちりと、橋本中佐の両肩に手を置いて、桜井薫は正面から彼に訴えた。

「私たちは、この事件で傷ついた多くの人々を救わなければならぬ。それが私たち、地球防衛軍の使命だから。そのために、あなたの力が必要になる。彼らと同じ傷を負ったあなたの力が。そう、これはきつと、神があなたに与えた試練」

「酷い神だな」

「あなたがより大きな人間になるための儀式だったの。あなたは、痛みを乗り越え、更に強くなった！ さあ！ みんなが、家族が、あなたの復活を待っているわ！ 今こそ！ あの坂本猫馬に！ 目にももの見せてやりましょう！」

「確かに。うんこを漏らす儀式。乗り越えたらなんかすつごく強くなれそうな気はするな」

後ろでうんうん頷く演説君の頬を、桜井薫は三往復ビンタしたあと、ケツを蹴り飛ばした。

酔っぱらいの橋本中佐は、ぼろぼろと涙をこぼしていた。首に下げた、十字架を握りしめ。

12 秘密基地の惨劇

花子さんは唇を噛み締め、項垂れていた。

頭頂部が光ったおじさんの言うとおりだった。

情けない。

自分はあまりにも子供すぎた。

もう18歳にもなるのに。

だめだな。

また奈々太ちゃんを傷付けて。

反省しなけきや。成長しなけきや。

だけど。

もう、この星には居られないのだ。

本当に。

反省しても。

成長しても。

奈々太ちゃんとも、道夫さんとも、別れなければならない。

猫馬さんとも、みんなとも、別れなければならない。

だから哀しくて。

花子さんは泣いた。

瞳から、涙がこぼれ落ちて。

やはり、茶色い光線も。

ご一緒だったけど。

やばい！

花子さんは一蹴の判断で後ろを振り向きつつ、目を閉じた。
最近の学習の成果だ。

だけど。

流れ出る茶色い光線は、無情にも花子さんの後ろにいた、駒田少佐と女性士官と、

……『奈々太あー、今助けたるでええー！』叫んで突入してきた珍味くんを直撃していた。

「うおおおお。産まれる、茶色いのが産まれるううう」

「いやあああ。わたしは駄目よ！ わたしは勘弁してええー」

『何が何だかさっぱりやー！！！』

目が細められたことによって、広がらず高密度な茶色になった光線は、劇的な効果を発揮してしまった。

ぶしゃー。悪魔が産声を上げた。

「あの、ごめんね？」

花子さんは素直に謝った。

「ごめんじゃねええええー！」

女性士官は絶叫した。

駒田少佐はしくしくと泣いている。

でも珍味くんは猫だから平気だ。猫的にスッキリした顔で絨毯でお尻を拭いている。

怒りのあまり、女性士官は、包丁を拾った。

近くにいた奈々太ちゃんの腕を引っ張り、拘束する。

「……うつ、臭い」

奈々太はつい素直になった。

「お黙りなさい！ くそガキ！」

『奈々太！』

珍味くんが叫ぶ。

「糞はあんたじゃ……」

そんな戌井警部の指摘は、

「きいーーーーー！ お黙り！ お黙り！ お黙り！」

女性士官の感情を和ますどころか、逆なでしてしまったようだ。彼女はより強く奈々太ちゃんの首を締め付け、包丁を振り回す。

「奈々太ちゃん！」

花子さんが叫ぶ。

「このままじゃ終われない！ あの子の言つとおり！」

女性士官は、アヤメちゃんを包丁で指し示してから、

「この糞女に、誰かが復讐しないとイケないのよ！」

「えー、またわたしのせいにするうー？」

アヤメちゃんが部屋の隅で不平を言った。

アヤメちゃんは色々な心労から、少々ブラックアメヤになりつつあった。

「だから糞はあんたじゃ……」

戌井警部は指摘した。

「きいーーーーー！ お黙り！ お黙り！ お黙り！」

女性士官は包丁を振り回した。

彼女の目は、花子さんが怒ったとき以上に真っ赤に充血していた。
ぜいぜい息を荒げた後、

「さあ、エイリアン！ 私が退治してやる！ そのナイフで、今すぐ胸を刺して死にな！」

女性士官は叫んだ。

奈々太ちゃんの頬を、包丁の背でぴたぴたと叩きながら。

「この子を殺されなくなかったらね！」

『待て！ 人質交換や！ ワシが人質になったる！』

飛び込んでいく猫。

「猫の人質なんて意味があるかあ！」

珍味くんの英雄的行動は、桜井大尉にあっさりと却下されて蹴り飛ばされた。

『なんでや！ なんで猫は人質になれんのや！ じゃあ、猫質ではどないや！』

「此処はわたしに任せろ！」
演説くんだ。

「止めなさい！ 桜井大尉！ 馬鹿なまねは止めるんだ！ うんこを漏らしたくらいでなんだ！ 君は、君は、愛する地球を冒瀆するつもりなのか！」

『冒瀆？』

珍味君が尋ねる。

演説君が頷いた。

「ああ、そうだ。うんこをすることは全然恥ずかしい事じゃない。いや、それどころか、誇らしいことなんだ。それは、それは人間が生態系の中で生きている証拠なんだから！」

演説君は、天井の証明を、眩しそうに見上げた。拳を振り上げ、

「うんこは、人間がこの星の一部であり、住人である証なんだよ！食べ物を与えてくれた地球に対する、感謝のお返しなんだ！それは肥料となり、地球をより豊かに育ててくれる！しない人間なんて居ない。みんなするんだ。地球への感謝の贈り物を！だからうんこすることを恥ずかしがる人間の方が、よっぽど恥ずかしい人間なんだ！」

『おお！』

珍味君は何かよく分からないなりに感動した。

「さあ、桜井大尉。その包丁を渡すんだ。恥ずかしがることはない。これはそう、試練だったんだ。地球が君に与えた試練だ。乗り越えれば強くなれる。そして、そういう趣味の人もいる！わたしはそういう君も嫌いじゃないぞ！　っていうか、好きだ！　いつもの素直な大尉に戻って、さあ、奈々太ちゃんを解放するんだ！」

演説くんが部下を説得する。

「さつきからうるせえぞ！　ちょびヒゲ！　黙らないと切り刻むぞ！」

凄い剣幕で女性士官こと桜井大尉に包丁を突きつけられ、演説くんは「ごめんなさい」と直角に頭を下げて謝った。

「こえー」

演説くんは部屋の端で体育座りして震えている。
ちよつとドキドキしながら。

「はやくしな、エイリアン！ このガキを挟りたいのかい！？」

桜井大尉は奈々太ちゃんの頬に包丁の先端を押しつけた。
血の玉がぼつりと浮き上がり、細い筋となって頬を伝う。

「うつ」奈々太ちゃんは目を堅く瞑り、小さく呻く。

『奈々太！』

「待つて！」

花子さんは慌てて落ちている果物ナイフに飛びついた。

「さあ、早くしな！」

桜井大尉は奈々太ちゃんの身体を揺さぶり、包丁を突きつけ、催促した。

花子さんは真っ青な顔で、自分の胸にナイフをあてがった。

『花子さん！』

珍味君が叫び、

「待て！ よすんだ！」

巡査の階級章を付けた警察官が、戌井警部の前に出て、制止の声を出した。

此処には変な人ばかりが居たわけじゃ無く、ちゃんとまともっぱ

い警察も居たのだ。

彼は桜井大尉に向かい、

「そんなことをしたら、君は人殺しになってしまうんだぞ!？」

『そうや! 人殺しになってしまうんやぞ!？』

「ふん、何を今更。うるさいわね! 黙ってな!」

声を荒げる桜井大尉だったが、その瞳にはほんの少し、動揺が走っていた。

巡査は思った。

今は興奮しているが、彼女が落ち着く時間を稼ぎさえすれば、何とかなるかもしれない。

で、どうする？

国のお母さんの話をするか？

カツ井を取ってみるか？

人間だけど犬の戌井警部が、悩める巡査を押しつけ、ずいっと前に出た。

両腕を組んで、偉そうな態度だ。

俺に任せな、若造。

その背中はその語っていた。

だから巡査はカツ井を注文することもなく後ろに下がって沈黙した。

「君の気持ちはわかる!」

戌井警部は声を張り上げた。

「だが、我々は警察として、いや、一人の人間として、目の前で殺人を犯させるわけには行かんだ!」

「ふん、そろいも揃って……そんなにこの宇宙人を助けたいわけ？

地球人のわたしよりも!？」

「私は、君も含めて、全ての人を救いたいのだよ!」
警部は胸を張った。

『うつうつ、さすが警察の人や』
珍味君は感動した。

「黙れ!……ふんつ、適当なことを。どうやって、どうやって助けるって言うのよ? このわたしを!? ……どうやって……」

桜井大尉は、涙目だった。

「どうだろう、こうしては?」

戌井警部は穏やかに告げた。
優しく、大尉の瞳を覗き込んで。
桜井大尉は、僅かに目を反らした。

「我々は目の前で殺人を犯して欲しくない。だが、君は復讐をした。このままでは終われない」

こくり、と桜井大尉は頷いた。

「じゃあ、こうしよう。その女に、自分の目を、抉らせればいい」

『いや、なんでやねん! あかんやろ!』
珍味君が突っ込んだ。

「警部! な、何言ってるんすか? あんた何を言ってるんですか
ああ?」

巡査が警部を揺すりながら抗議したが。
警部は揺すられながらも若造を無視して。

「傷害なら殺人罪と比べてずいぶんと罪も軽い。ニュースにもなりにくい。どうした？ 言わないのかね？ 自分で目を抉れと。はっ、君の復讐心もたいしたことはないなあ」

成井警部はやれやれと首を振って、尻を向けると屁を放いて、桜井大尉を挑発するのであった。
さらにはアヤメちゃんからカメラを奪い取って、撮影を始める始末だ。

「じよつ、上等じゃない！ やってやるわよ！」
馬鹿にされて桜井大尉は声を荒げた。それから、打算した。

「でも、確かにそうよね。わたしも、殺人罪になって豚箱で一生を過ごしたくはないし……簡単に殺すよりもそっちの方が復讐になるかもしれない……良いわ、おい！ エイリアン！ 目を抉りな！ 今すぐにな！」

桜井大尉は花子さんに包丁を突きつけ、

「じゃなきや、このガキの目を抉るわよ！」

『判った！ なら！ なら！ 俺のヒゲを一本くれてやるうう！
それで奈々太を解放するんやああ！』

「珍味くん」

花子さんが穏やかに制止した。

「静かにしてて」

『……………わかった』

珍味くんは、引き下がった。

決して自分は邪魔な子だと反省した訳じゃない。

花子さんの瞳に、強い決意を見て取ったから引き下がった。

花子さんは大尉に向き直った。

「……………約束して」

静かに、言葉を紡ぐ。

「これ以上、奈々太ちゃんを傷付けないって」

「そうね。約束してあげても良いわ。あなたがちゃんと両眼とも潰したら、あなたの子供は解放してあげる」

「花子……………さん？」

奈々太はそつと目を開け、震えながら呟いた。

橋本くんのお父さんに掴まったときも怖かったけど、あの時はどこかで安心していた。

まさか奈々太を刺したりはしないだろうと。

だけど、今は違う。

この人はきつと躊躇無く奈々太を傷つける。
傷つけられた分だけ。

それ以上に。

花子さんは、奈々太ちゃんに笑いかけた。
優しく、笑いかけた。

奈々太ちゃんが、安心出来るように。
そして、ゆつくりと花子さんは、自らの瞳に、切っ先をあて、
埋めていった。

花子さんのナイフが、花子さんの瞳に食い込んでいく。

奈々太は目を瞑った。

たまった涙が大きくこぼれ落ちた。

奈々太は叫びたかった。

やめて！ と叫びたかった。

でも奈々太は何も言えなかった。

頬には冷たい包丁があたっている。

怖かった。

だから何も言えなかった。

こんな自分は嫌いだった。

ただ泣いているだけの自分が。

平気で人を傷つけて。

傷ついても居ないのに傷ついた振りをして。

深く考えもせず嘘を付いて。

哀しませるようなことばかりするから。

自分は何も悪くない。

その言い訳はもう自分ですら騙すことは出来なくなっていた。

やめて！ と叫びたかった。

なのに泣いていることしかできなかった。

頬に刃物の冷たさがあつた。

強くなるって約束したのに。

頬に刃物の冷たさがあつた。

自分と約束したのに！

奈々太はゆつくりと目を開いた。

花子さんの右の眼窩からは、真っ赤な液体が溢れていた。

奈々太はもう一度目を閉じたかったけど、踏ん張った。
つばを飲み込み。

花子さんのナイフが、左目に移動する。

「やめて」

小さなかすれる声。

包丁が強く頬に押し当てられた。

奈々太は喉を引きつらせた。

それでも。

「やめて！」

もう一度言った。

今度はちゃんと声が出た。

「……黙りなさい」

包丁の先が、ちくりと頬を刺激した。

痛かった。

でも、無視した。

「もういい。わたしが悪かった。ごめんなさい。認めるから。意地悪しないから。もういいから！ はなこさ…… お母さん！」

花子さんは、少しびっくりとして、きょとんとして。

それから、嬉しそうに微笑んだ。

残った目から、青い青い光がこぼれる。

青い光が、優しい気持ちで、みんなを、優しく包み込む。

奈々太の頬に、押しつけられた包丁が緩んだ。
桜井大尉の目に、正気の色が戻る。

「奈々太ちゃん」

花子さんは、優しい声で言った。

「大丈夫だから」

それから、左の目にナイフを向けた。

「だめ！」

奈々太は叫んだ。

「絶対にだめ！」

堪えきれない涙を流しながら。

13 中の人なんて居ない

人間だけど、ある意味で犬の戌井警部の耳には、悪魔の囁きが聞こえていた。

問題なし。現状維持よ

こんな声だ。

だから戌井警部は、こんな状況でも堂々とカメラを構えて、ふんぞり返っているのであった。

内心ではもの凄くドキドキしてたけど。

猫馬さんの命じるままに、気軽に「目を抉ればいいじゃん」とか言ってしまったけど。

今になって少々心配になっていた。

もしかして、俺は道を踏み外してしまったのではないだろうか？
職を失っちゃうんじゃないだろうか？

そんな気がしないではない。

警察官としての職業意識と保身が、戌井警部を責め立てていた。

何をしている、戌井。

これで良いのか？

止めなくて良いのかよ！？

お前は警官なんだぞ！

人である前に、犬である前に、お前は一人の警官なんだぞ！

お前はいつたい、何のために警察官になったんだよ！

人を救えなくて、お前は何のために警官になったんだよ！

心がそう叫んでいる。

俺はいつたい何のために警察になったのか？

戌井警部は、自問してみて、ああ、思い出した。

「ヘーボチって頭いいんだ。じゃあ警察に入んなよ？ え？ 理由？ なんか便利そうだから」

猫馬さんに言われて、そして俺は警察の道を選んだんだ。

なんだ、コレで良いんじゃない。

初心を取り戻した戌井警部は、堂々とカメラを構えたまま、なんかその頃の思い出に浸たってにやつき始めた。

目の前では、戌井警部が、堂々とカメラを構えてにやけている。巡査には、警部の考えが理解出来なかった。

目を抉れなんて、なぜ、あんなことを警部は仰ったのか？なぜ、警部はこの状況でにやついていられるのか？

理解できない。

これが、ムー大陸のやり方だともいうのか！？

巡査は憤った。

これではまるで、修羅の国じゃないか！？

この人はこの地治める修羅あるのか！？

巡査・浜口拓也がムー大陸に渡ってきたのは、ごく最近である。宇宙人絡みの事件は、これが初めてだった。

だが、浜口巡査には信念があつた。

宇宙人も地球人も関係ない。

修羅も羅将も関係ない。

だから浜口は、戌井警部が「目を抉れ」とかのたまつた後、やるべきことを実行した。

こつそりとカツ井を注文したのだ。

この事件は、カツ井無しでは解決することは出来ないから。

カツ井に解決できない事件はない！。

ついに、その信念を試すときが来たのだ。

浜口巡査の実家は、カツ井専門店 浜口 だった。

彼はその跡取りである。

カツ井こそ、世界を救う。

宇宙に羽ばたけ、レッツ・ザ・カツ井。

だから浜口拓也は、カツ井を広めるために警察に入った。

だが、浜口巡査は焦れていた。

出前が、まだ、来ない！！。

なんてことだ！ 家の店なら、もうとつくに届いてるはずなのに！

浜口巡査は、明日にもムー大陸に支店を出そうと、決意していた。

アヤメちゃんの耳にも、猫馬さんの囁きは聞こえてくる。

お疲れさん。もう撮る必要はないわ。カメラはその警部さんに渡してこつちに来てちょうだい。大丈夫だから

そう言われてアヤメちゃんはすでに部屋を退出していた。

「猫馬、踏み込むわよ」

まだ。危険があると判断したら、お願いね

京子は今、屋根裏に潜んでいる。

彼女は迷っていた。

彼女の判断では、奈々太ちゃんに危険はない。

あの女の殺気は、完全に消失している。

彼女はすでに冷静になっている。

後悔している。

気配で伺える。

奈々太ちゃんを解放して、刃物を落とすのは時間の問題だろう。

もし、突発的な危険が発生したとしても、サーティーンなら対応できる。

彼女が50メートルと離れていないビルの屋上で構えている。開け放たれた窓を見据えている。

彼女の腕と愛銃なら、0.01秒で事を決することが出来る。

相談所の人間は、表に出ない方が良い。

それも判っている。

テレビに映らない方が良い。

出れば、全てが台無しになりかねない。

それどころか京子が飛び込めば、逆に突発的な危険を起こしかねない。

だが。

残酷だ。

残酷すぎる。

奈々太ちゃんが可哀相だ。

だから、踏み込もう、花子さんが左目を失う前に。

判っていると思うけど。これは花子さんと奈々太ちゃんの戦いだから。邪魔しないでね、二人とも了解

優しくも冷たい猫馬の指示と、サーティーンを抑揚のない返事。

京子は、力を抜いた。首を横に振る。

「判っているわ」

おでは？

ジオンビーも。絶対に動かない
わかた

その頃、演説くんは、部屋の隅でドキドキしていた。

桜井大尉は、怯えていた。

なんで、なんでこんなことになってんだろう？

こんがらがった頭で考える。

花子さんの血を見て、青い光を浴びて、熱くなっていた頭は、急に冷え切っていた。

まさか本当に目を潰すとは、彼女は思ってもいなかった。

いや、興奮しすぎて、考えてもいなかった。

潰すか普通？ 潰さないよね？ 普通？

彼女は自分に問いかけた。

潰すわけがない。自分なら。誰だって。

わたしは、わたしは、

……女囚になってしまふのだろうか？

それに。

怖い。

この女、怖いよ。

何で目を潰して笑ってるのよ？

何で血をたらたら流して笑ってるのよ？

頭おかしいんじゃないの？

絶対おかしいんじゃないの！？

花子さんが、左目にナイフを当てる。

まさかこの女、左目も潰す気なの？

なんで？

もう右目だけで十分だよ。

左目も潰したら、奈々太ちゃんを解放しなきゃいけない。

そしたらきつと、警察とかにタコ殴りにされちゃう。罪も重くな

っ
ちやうよ。

どどどどどうするのよ！ これ！

早くしなきゃ！ 何とかしなきゃ！

この女が左目を潰したらおしまいよ！

薫！ 考えるのよ！

早く考えるのよ！

あなたなら出来る！

きつと出来る！

なんで、なんでこの女は笑いながら目を潰せるのよお！

なんで、なんでこの女は！

揺れる桜井大尉の視線が、部屋の隅でモジモジしている演説君を捕らえ。

はっ、そうか！ そうだったんだ！

桜井大尉の脳髓に、一つの何かが閃いた。

そうなんだ、花子さんは、

時を同じくして。

もっ見てられへん。

もっ見てられへんで！

『奈々太あーーー わいが助けたるでええーーー！！！』

ついに、珍味くんが、猫的に飛び出した！

桜井大尉は叫んだ。

「あんた！ あんたやつぱり着ぐるみだっただんだね！ だから平気なんだよね！？」

くわ。

花子さんが目を剥いた。

「中の人なんていなあ——い！ 誰がおっさんのよ！ それに、それに道夫さんはホモじゃなああ——い！！」

花子さんの左目から噴出した、最大級の赤い光は。

「きいやあああああああああ——い！！」

桜井薫を包み込み。

『奈々太あ—— わいが助けたるでええ——！！！！』

と、飛び込んだ珍味くんを、

『何が何だかあああああああああああああ——！——！——！』
巻き込んで、

「うわわわあああああああああ——！！——！！——！！」

…………… 奈々太ちゃんも飲み尽くした。

しーんと静まりかえり。
ぷすぷすと、焦げ臭い匂いが漂う室内。

……。

「あの、ごめんね？」

花子さんは素直に謝った。

「犯人を確保！」

イヤホンからの指示を受け、戌井警部が叫ぶ。
怖々と、花子さんを拘束しようとする警察に。

「違う！ そっちじゃなくて！ あっちの犯人！」

戌井警部は桜井大尉を指さし、慌てて注意した。
警察が気を失っている桜井大尉を逮捕する。

亀山号の中。

「は、花子さん……………い、色々と、恐ろしい子……………」
猫馬さんは、引きつった顔で、うめいた。

「でも……………予定通りよ……………きつと……………」
強がってみる。

それから、小さく溜息を吐いて、小さく微笑み、
インカムに向け、

「みんなー、てっしゅー。お疲れさまー。アヤメちゃんもありがとう
ねー」

明るく告げた。

後の世に言う、スプラッタうんこ事件の終結である。

14 優しい大人に

もともと、亀ローには高価な機材はないし、夜中、しかも警察の包囲網の外からの撮影だ。

猫馬さんの妨害電波もある。

室内の状況はもちろん、会話は一つも拾えていなかった。

警察からの説明も、「凶悪犯が女の子を人質に立てこもっている」
だけしか与えられていなかった。

そんなわけで、アヤメちゃんや戌井刑事や飛空挺エルドラドが撮影し、亀山相談所が編成した映像を、いつものように事件が解決してから、まるで自分たちで撮りました！

的に亀ローは放送したわけであるが。

当然のように映像は、CGも駆使され、とことん編集捏造されていて。

「犯人は余所から来た男女二人組の流れの強盗（もちろん名前は偽名・顔写真はCG）」

になっいて、

「中西花子さんは奈々太ちゃんとアヤメちゃんを救うために人質交換」を要求したけど受け入れられず。

その後、奈々太ちゃんを傷つけようとした女犯人を

「花子さんが目からの火炎放射で瞬殺（見事に黒こげになって担架で運ばれる女の映像もあり）」

「ひるんだ男犯人は警察が取り押さえた（戌井刑事のカッコイ一本背負いの映像）」

なのであった。

インタビュールされた現場に居合わせただけの地球防衛軍のみなさ

んも、

「その通りです！」

と全面的に肯定し、娘のために危険を顧みなかった花子さんに賞賛と「着ぐるみ疑惑」謝罪の言葉を並べ立てた。

猫馬さんも、亀ローのインタビューに相談所所長の立場でマズルドーマ人の特徴を語った。

猫馬さんが用意したイメージ映像のマズルドーマ人が、灼熱光線で宇宙怪獣を撃滅するという、少しだけ大げさだった影響もあつて、町人の多くはマズルドーマ人は宇宙でも有数の戦闘民族と誤解したりしなかったり。

次の日。

会社を休んだ道夫さんと、校長先生、そしてふて腐れた優子先生は、漏らした人たちの家を謝罪してまわった。

半分くらいの人は、会ってもくれなかったけど。

奈々太は、病院のベッドで目を覚ました。
少し吐き気がして、頭がぼうつとしていた。

「日射病だって」

聞き慣れた声が聞こえて、奈々太は隣のベットをぼんやりと眺めた。

窓際のベット。

起きたばかり、太陽がまぶしくって、奈々太は腕をかざして目を遮り、目を眇めて仰ぎ見た。

アヤメちゃんがいた。

お日様を浴びて、アヤメちゃんが「おはよー」って言った。

「おはよー」

ぼんやりと返事を返して。

「アヤメちゃんも……怪我したの？」

一気に奈々太の目が覚めた。

えへへっ、寝間着姿のアヤメちゃんが、照れたように笑って首を横に振った。

「ずる休み。猫馬さんがベット空いてるから寝て行ったらって」

「……そっか……」

「わたし、入院って実は初めてなんだ」

「あっ、わたしもだ」

「なんかドキドキするよね。仮病だと思つとよけいに」

アヤメちゃんはそう言つて胸を両手で押さえている。

何となく、おかしくて、奈々太は笑った。

でも、涙が、ぼろぼろと零れてきた。

「ごめんね。アヤメちゃん」

「あれ、嘘だよ」

「え？」

「私、漏らしてないから」

よしよしと、奈々太の頭をなでる。

「ごめんね、嘔吐いて」

アヤメちゃんが笑いかける。

奈々太は首を大きく、横に振った。

「ごめん。ありがとう」

奈々太はもう一度謝ってから、アヤメちゃんの胸に顔を埋めた。
よしよしと、アヤメちゃんが楽しそうに奈々太の頭をなでる。

「さあ、行くのよ、花子さん」
「でも。でも、猫馬さん」

アヤメちゃんとは反対側。廊下側にある、奈々太ちゃんの隣のベ
ット。

カーテンが引かれていて中は見えないけど、ぼそぼそと話し声が
聞こえてくる。

「わたし、奈々太ちゃんに会わせる顔がない……助けるつもりだっ
たのに、逆に病院送りになってしまった」

「何言ってるのよ！ アレは事故よ！ きつと事故よ！ それに日射病くらいいたしたことないじゃない！ …… たぶんだけど」

「でも、奈々太殺しも敗れ去ったし、わたしにはもう打つ手がない。ないのよ！」

「ばか！ 奈々太殺しはまだ終わっていない！ 諦めちゃダメよ！

……いいわ、あなたがそこまで言うなら、神・奈々太殺しを伝授するわ！ この技なら、どんな奈々太もイチコロよ！ 神・奈々太ちゃんですらイチコロなのよ！」

「ほ、本当に！？」

「ええ、本当よ！」

「わたし、やるわ、猫馬さん！ 親・奈々太殺しをマスターして、親・奈々太ちゃんですら一撃で撃破してみせるわ！」

「そのいきよ！ 花子さん！ わたしも出来る限り協力してあげる。あなたの戦い、見届けてあげるわ！」

二人ががっちり両手を組み合って友情を確かめ合っていたら、

しゅぱってカーテンが引かれた。

奈々太ちゃんが、目尻に涙をためて、怖い顔をして、立っていた。

花子さんの顔は、右半分が包帯に覆われていた。

奈々太は花子さんのその顔を見ていた。

ぐっと、唇をかんで。

睨むように、見つめていた。

「あつ、電話だ」

黄色のポニーテールをした猫馬さんは、電話が掛かってきた振りをして、椅子から立った。

「ああつ、まって、猫馬さん！ 話が違いわ！ それにここの病室は携帯禁止だし電波が入らないって二人で確認済みじゃないですかあー！ー！」

花子さんの悲鳴は無視された。

おどおどと、花子さんは、奈々太ちゃんに向き直り、ぎこちなく笑いかけた。

「奈々太ちゃん……その、大丈夫？」

こくりつ、と奈々太は頷いた。

「ごめんね。怖い思いさせて。熱い思いさせて」

花子さんの表情が曇り始める。

一つだけの目が、伏せられる。

奈々太の顔も、くしゃりと崩れた。

奈々太は、花子さんの胸に飛び込んだ。
顔を埋めて。

「ごめんなさい！ ごめんなさい！」
声を上げて泣いた。

花子さんは、びっくりして。

それから、微笑んで。

何も言わずに、奈々太ちゃんをきつく、抱きしめた。

一つになった花子さんの瞳からは、青い光が漏れていて、奈々太を優しく包んでいた。

優しい大人に成長したい。

彼女のように。

強い大人に成長したい。

彼女のように。

奈々太は強く願った。

マズルドーマ人の光線は、相手の種族によって影響が変わってくる。

ぶつちやけマズルドーマ人同士なら、物理的に作用することはさほど無い。

花子さんの光を浴びた珍味くんは、こんがり黒くなっていた。

三毛猫が黒猫になっていた。

どうやら珍味くんの種族は、特に花子さんのビームと相性が悪いようだった。

『なんで、わしだけ黒焦げやねん』

「猫だからよ」

と逃げたふりして珍味君の横で隠れて覗き見している猫馬さんの

答えは、あながち間違っていない。

『猫に、小判か』

珍味くんは、よく分からないことを呟いてから。

『はふぁ』

ため息か欠伸かわからない息を吐いた。

奈々太ちゃんとは、向かい側のベットから。

少し開けたカーテンの隙間から。

抱き合う二人を見つめながら。

『ま、ええか』

珍味くんは、満足そうに、微笑むのであった。

終 相談所の奈々太ちゃん

事件ですよ、から三日後。

桜井大尉こと、桜井薫は、ムー大陸の首都、ムータンシティに護送されていた。

管理人さんの裁決を受けるために。

桜井薫は、花子さんに酷いことをしてしまったことを、とてもとても深く反省していた。

だから、やったことに対する罪は、償うつもりでいる。

ただし。

それが公平な判決であるのなら。

桜井薫は、怯えていた。

これでもかつてくらい、怯えていた。

ムー大陸の裁判制度は、無茶苦茶だ。

彼女の所属する反宇宙人組織・地球防衛軍は、再三にわたって抗議してきた。

だが、未だにその裁判制度は改められていない。

たとえムー大陸でも、加害者も被害者も人間の場合には、その地域の母体となった国の法律が適応される。

多少のローカルルールは混じってるけど、亀山町を初めとする日系では、日本の法律が適応される。

アメリカ系ではアメリカの、ガラパゴス系ではガラパゴ

ス諸島の法律が適応される。

なかには、そこにたどり着けばパンダに襲われるという理想都市
パンダーラのように、完全に独自の掟をいなく地域もあるけど。

それでも、その裁判は、必ず地球生命の手に委ねられていた。
だが。

ひとたび宇宙人が事件に関わった場合、そのルールは無効となる。
どこまでも完全無欠に。

宇宙人が、加害者であろうと、被害者であろうと、場合によっては
第三者であろうと、全ての裁判権は、宇宙人の手に渡されるのだ。
宇宙人によって、彼らの価値観によって、一方的に裁かれること
になる。

だから、桜井薫は怯えていた。

彼女は地球防衛軍の士官なのだ。

宇宙人にとっては目の上のたんこぶ。

それが、宇宙人に怪我を負わした。一生癒えない怪我を。
報復裁判を覚悟せざるをえない。

「判決は、今日一日、反省すること」

管理人さんは、穏やかに告げた。

だけど怯える桜井薫には、悪魔の笑みに見える。

今日一日反省って何？

今日一日、拷問とかされるの？

目とか抉られたりするの？

爪の間にとんがらし塗った爪楊枝とか突っ込まれたりするのぉー！！？

震える桜井薫は、思ったことを素直に聞いてみた。

「……こわいこと言うね、君って。そういや、花子さんに目を抉れって言ったんだってね？」

管理人さんは、痛そうに顔を歪めた。
やはり、拷問されるのだ。

その表情から桜井薫は悟った。
口にとんがらし塗った電球とか銜えさせられて殴られたりするんだ。

管理人さんが言う。

「そんなこと言っちゃダメだよ？ 目を抉れとか言っちゃダメだよ？ 凄く罪が重いんだよ？ 相手がマズルドーマ人じゃなかったら大変だったんだよ。……マズルドーマ人の目には痛覚がないからセーフだけど」

「痛覚が……ない？」

「うん。だってマズルドーマ人は目から光線を出すでしょ？ 痛覚あつたら大変だよ？ いや、ほんとに」
「痛覚が……ない」

それでも、あの女は自分の目を潰して見せた。
例えば痛覚が無くても。一生その傷を背負って生きていく覚悟を持つて。

薫はもう彼女を恨んではいなかった。
それどころか謝罪の気持ちでいっぱいだ。

血の繋がらない娘のために取ったあの時の行為に、今となつては深い尊敬の念すら抱いていた。

「あとね、マズルドーマ人の目は、生え替わるから」

「ハエ？ カワ……ル？」

きよとんと、桜井薫は顔を上げた。

「色んな光線を放出するからね。傷みも早い。定期的にマズルドーマ人の眼球は生え替わるよ。花子さんは、秋には生え替わるよ」

「秋に……ハエ、かわる、の？」

「うん。古い目玉がころりと落ちて」

……それでも。それでも、秋まで目が見えなくなるのだ。

「あと、損傷した場合は、だいたい三日くらいで完治するよ？」

「三日……くらい？」

「うん。もう花子さんの目は元通りに治ってるよ。……でも、怖いよね？ マズルドーマ人って。なんか爪を切るくらいの感覚で目とか潰しちゃうでしょ？ ちょっと損傷したからって気軽に。僕、あれ嫌いだな。なんかすつごく痛そうで。……あれって、僕たちには見えないところでやって欲しいよね？ ね？ ね？」

同意を求める管理人さんに、

「何じゃそりやーーーーー!!」

桜井薫は暴れた。

これでもかっつくくらいに暴れた。

「ちくしょーーーーがつでむ、さのびーーーーち！ ひんじゃくひんじゃくうりりりりりりいいーーーーー!!」

暴れに暴れた。

管理人さんが「もう反省しないでいいから帰ってー」と泣いても、暴れ続けた。

彼女の暴れっぷりは、猫馬さんも入っているムー大陸の要注意人物リストに、堂々7位でランクインするくらい、ですとろーいだった。

ちなみに。

宇宙では医療の再生技術が確立していて、眼球の再生はマズルドーマ人でなくとも、比較的容易だった。

そのため、地球と比べて再生可能な障害の罪は軽く、殺人の罪は劇的に重かった。

「詐欺だ」

奈々太ちゃんは、ふて腐れていた。

「潰れた目が、三日で元に戻るなんて」

アメヤちゃんは、くすくすと笑っている。

「でも良かったじゃない？ 治らないよりも」

「まあ、そうだけど。……アヤメちゃんは知ってたの？」
「うん。猫馬さんに聞いてたよ……目を潰すところは見てないけど」
ちよつと残念そうな、それでいてほつとした表情。

朝の登校。

病院まで迎えに来てくれたアヤメちゃんは、靴も帽子も洋服も、おニューだった。

しかもそれは、子供服の高級有名ブランド　テケリ・リッ・テケリ・リッ　の人気タイトルばかりだった。

「……それ？　どうしたの？」

聞かないのも変だと思い、奈々太は聞いてみた。

「これ？　かわいいでしょ？　道で拾ったの」

アヤメちゃんは嬉しそうにはにかんでから、一回だけ、くると回った。

「そっか。猫馬さんに買って貰ったんだ」

「はて。なんのことでござんましようか？」

アヤメちゃんは足と手を一緒に出して、カクカクと2歩だけ歩いた。

「アヤメちゃん」

奈々太はぷつと吹き出してから、

「ありがとう」

て言った。

アヤメちゃんは、ほつと息を吐いてから、にっこり微笑んだ。

「友達だもん」

奈々太にとっては、三日ぶりの学校である。

あれだけの騒ぎだったのに、学校では、笑い話にされていた。

奈々太よりも一日早く学校に行ったアヤメちゃんが、色々と言得してくれたらしい。

何人かはちらちらと盗み見るように、奈々太に厳しい目を向けていたけど。

でも中島くんを初め、何人かの人々が、特に男の子が、奈々太にも凄く優しくかった。

亀山小学校から、亀山町から、うんちな傷跡が消えるまでには、まだ時間がかかるかもしれない。

それでも、奈々太は頑張ろうと思っていた。

逃げることなく、誤魔化すことなく。

みんなに頭を下げて廻り。

戦い抜いて。くたくたに疲れて。

『おう。奈々太』

校門で、珍味くんが待っていた。

「毛、染めたんだ？」

『ある意味な』

「パーマも、かけたの？」

『ある意味な』

珍味くんは毛を黒く染めていて、パーマも掛けていて、凄くワイルドだった。

『がんばれよ、奈々太』

「うん」

珍味くんは猫なりに前足を振ると、奈々太ちゃんに背を向けて姿を消した。

奈々太も、元気よく走った。

花子さんの待つ、我が家に向かって。

「おかえりなさい」

「ただいま!」

夕食の席で。

「わたし、決意しました」

花子さんは、哀しそくに微笑んで。
お箸と茶碗を置いた。

「これ以上、奈々太ちゃんや道夫さんに迷惑を掛けられないから」

「花子さん!」

そんな、帰るなんて言わないで!

「だから、眼鏡を掛けます！」

「はい？ えつと、……めがね？」

「そう。眼鏡です。光線を遮断する安全眼鏡です」

「そんな、便利なものがあるの？」

「はい。あるんです。宇宙には」

「なんで、使わなかったの」

「だって」

花子さんは悩ましく身を揉んだ。

「道夫さんが『君は眼鏡を掛けてない方がプリティーでラブリーだよ』って言うてくれたんだもイタ！ 痛！ 奈々太ちゃん痛い！ ちよつと痛いよ！」

「大丈夫だよ、まいわいふ花子。眼鏡を掛けた君も知的でエレガ痛つ！ 痛！ 奈々太痛いつて！」

「奈々太や。なんすばでいーは眼鏡を掛けても似合うんじゃひよ。似合うんじゃひよ。おまえもはやく眼鏡の似合う立派ななんすばでいーになりなひやれ。なりなひやヒタ！ ヒタ！」

だから、奈々太ちゃんは、今日も相談所で生活している。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8402h/>

ムー大陸によろこそ

2010年10月10日05時45分発行